
No.0 !

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO.0!

【Zコード】

Z0840X

【作者名】

軽い雪

【あらすじ】

一般学生村雨は、トラック事故に合いで死亡。

それは「神の失敗」というテンプレで、転生せてもうえりふる事に。

彼が望んだのは、二つの能力だった。

狭間に生きる者の力を。

オリ主による、悲劇崩し。

彼は、どのように原作メンバーを助けていくのか…？

今小説は作者の処女作です。完結まで連載出来るよう頑張るので、
生暖かい目で見守って頂ければ幸いです！

オリ主 ふるふこーぬー(前書き)

すつげー今更なプロフイールです w (2011.11.25)

オリ主 ふるふいーるー

【身体設定】

firstネーム：村雨 陸兎（むらさめ りくと）

2ndネーム：ヴァン

身長は全盛期で185cm辺り。

体重は平均で髪の毛は金髪、目は蒼。

趣味は読書、ノーバディーの観察、悪戯

好きな食べ物はお米、そーめん、肉等。後、枝豆。嫌いな物はスイカ、メロン。

好きでも嫌いでもないのはゆで卵。

性格は基本的テンション高め…だが、一目を気にするタイプ。

血液型はO型。

暑さに弱く、寒さにそれなりに耐性がある。だが心が熱い奴は大好
き。

駆け引きが苦手で、交渉事が特に苦手。

ある程度は目の上の人に対しても敬語を使うが、本人でも気づかない内にタメ口になつてたりする。

分け隔てなく交流を持つよう心がけている。

お節介でもあり、大の驚かせ好き。

特に、『冷静、クール、イケメン等の顔が驚愕に浮かぶのを見ると達成感が浮かぶらしい。

ただ、時々加減を間違えて遣りすぎてしまふ事もある。遣りすぎた場合には、ちゃんと謝つているようだ。

テンションの上がり下がりで口調が変わる。

主に作者のせいだと言われているが本当のところは解らない。

（ネタに走つたり…等。）

【能力】

「13 organization mode（十三機関モード）」

十三機関のメンバー全員の能力を使用する事出来る。

メンバーの能力を使うには、格メンバーの？称号？を唱える。

No.1 「狭間の指導者（The leader of an

interval)」属性・無

タイプ・接近型

No.2 「魔弾の射手 (Freeshotter)」属性・空間

タイプ・遠距離型

No.3 「旋風の六槍 (Whirlwind Lancer)」
属性・風

タイプ・近接&遠距離どちらとも可

No.4 「じてつく学究 (Chilly Academic)」

(今小説では凍てつく学究。) 属性・氷

タイプ・援護、若しくは遠距離型

No.5 「静かなる豪傑 (Silent Hero)」属性・土

タイプ・接近型

No.6 「影歩む策士 (Cloaked Schenier)」属性・

幻

タイプ：特殊型

No.7「月に舞う魔人（Luna Diviner）」属性：月

タイプ：接近型

No.8「踊る火の風（Flurrry of Dancing Flames）」属性：炎

タイプ：中距離○ゲリラ型

No.9「夜想のじらべ（Melodious Nocturne）」属性：水

タイプ：遠距離型

No.10「運命を賭す者（Gambler of Fate）」属性：時

タイプ：特殊

No.11「優雅なる凶刃（Graceful Assassion）」属性：花

タイプ：接近型

No.12 「非情の妖姫 (Savage Nymph)」 属性・雷

タイプ・ゲリラ型

No.13 「めぐりあう鍵 (Key of Destiny)」 属性：光

タイプ・近接 & 遠距離可

基本的には、能力の無駄遣いになりそうではある。

能力についての制限は、重複不可ということ意外は特にない。

闇の回路については封印させてもらっています。…そのときになつたら使えるかも。

あくまで、能力が使えるだけなので、基本スペックを鍛えなければならぬ。

因みに不老という大きいおまけ付き。流石に不死ではない。

つまりは、防御力は能力不発動状態の場合は一般人と変わらず、銃弾が頭に貫通すれば死ぬし、

運が悪ければ、食中毒でも死ぬ場合がある。

「ノーバディー創造」

ゲーム内の敵キャラ、「ノーバディ」のあらゆる種類を創り出せる。能力レポートの同じく詳細が記載されているので目を通してもらいたい。

合計含めて15種類近くが存在している。

一体一体が強力で、異能による攻撃以外（物理攻撃等）は攻撃が通用しない。

ノーバディー等の説明に関しては、Wikiや小説内で説明している巻があるのでそちらを参照してください。

「アーマー・テラの能力」

通称、鎧の男。

長身の鎧の姿になり、キープレードを変形させて戦う。

『KHM』で間違いなく最強を誇る裏ボスで、キングダムハーツ史上で一番「戦つて楽しかった」

と評判である。残念ながら、作者にはトロウマシカ残っていない。

「ヴァニタスの能力」

ヴァニタスはラテン語で「空」と言つ意味。

それが理由なのか、主人公「ソラ」と瓜二つの顔をしている。ラスボスの一人。

純粹な闇の心から生まれた存在で、闇の力を振るう事が出来る。

能力使用に至つて、闇を自ら取り込む必要がある。

絶妙なバランスによつて本当の力を振るう事が出来るが、少しでも闇に押されれば、理性が薄くなる。

能力レポート（前書き）

2011/11/21

ランキング、No.1～4までの能力詳細記載。

" / 12 / 3

能力について少し追加記入

能力レポート

【簡易機関強メンバーTOP3】

一位 NO.1

二位 NO.3 / NO.5

三位 NO.13

(公式設定)

【機関メンバー能力／その他詳細】

NO.1 称号：狭間の指導者

属性：無 武器：エアリアルブレード

配下ノーバティ・ソーサ

ラー

機関のボス。十三機関を束ねる人物である。

実力は機関内最強で、声優がある若本さんである。（バルバトス、ドラゴンボールのセル等の声と同じ）

彼に逆らつた者は容赦なく下級ノーバティーにされてしまう。（主にダスク）

被害者が居るかどうかは解らない。でもなぜか機関メンバーはそれ

を信じる。

N.O.・8もその一人で、「奴に逆らつたら、ダスクにされちまうぞ！」と言っていた。

因みに、その時の反逆者はN.O.・13だが、最終的にダスクにされる事はなかつた。

武器「エリアルブレード」は、機関メンバーでも祐一、未来的な武器。

見た目スター・ワーズの「ライトセイバー」である。剣などにある、柄はなく、手からそのまま赤い光が棒状に伸びている。一刀流。

原作では主人公にライトセイバーがあたつても切れるような事はなく、打撃に近いようだった。

（そこで切れれば確実に？？？指定を受けるだろうが。少なくともグロ注意にはなる。）

いや、単純に主人公が堅いのか。

今小説では、『無のエネルギーで刀身を作っている』といつ設定でスッパリ切れる。

振つたらブンブン音がする。これは原作でもだが。

他にも、武器と同じ色の赤いビームを大量に乱射したりする事が出来る。

今小説ではこれも、武器と同等の威力を持つ事とする。なにやら軌道も変えられるらしい。

变幻自在の体術、おまけに分身最高一人。

分身については、偏在と同じ設定に。

KH2の覚醒技（必殺技）は、ドーム状に配置された無数の光弾を相手めがけて一斉に降り注がせる「全方位ショット」。そして、バグな主人公を苦しめた『闇へのいざない』『無へのいざない』。

効果は「徐々に主人公の体力を奪う」という物。本作でも、徐々に相手の生命力を奪う。

（『闇へのいざない』は少し違うが、効果はさほど変わらないので同じとする。）

最終決戦の『鎧モード』であるが、

「N.O.・13を除く、全ての機関員の能力が使える」という物だが……。

今小説では封印となる予定である。

他の状態変化は、『身体能力の向上』等が含まれる。

N.O.・II 称号：魔弾の射手（F re e sh o o t e r）

属性：空間 武器：ガンアロー 配下ノーバディ・スナイパー

武器である「ガンアロー」は、クロスボウという矢を射出する武器と銃を融合させたような物。射出するのは紫色のエネルギー弾で、補充をしている所、リロード

は必要らしい。

因みに、ノーバディーになる前：一般人の時から愛用しているようで、その頃から瞬間移動が出来た。

主人公といい、人間なのかと疑いたくなる。
(主人公もちやつか瞬間移動が出来る。空も飛べる。正確には滑空だが。)

攻撃方法は、謎の重力逆さま態からの射撃を含め、死角からの射撃、二丁のガンアローを合体させ、スナイパー・ライフル式にして狙撃したりが基本。
ちゃつかり、エネルギーを強く収縮させた一回り大きい弾を射撃してきたりもする。

因みにその弾は暫く地面や壁を跳ね返つたりしている。

移動は瞬間移動、そして主人公を接近させない為の空間変異等が出来る。

リミットカット版（単純に言えば、強化された状態）では、無限バンダナでも付けた訳でも無いのに、
段数無限だったり、弾速が早くなつていていたりもある。

今小説では、殆どの力を使えるようにしている。
ガンアローの能力については、

『氣絶打ち』… 文字通り相手が氣絶する程度の威力

『狙撃』… スナイパー・ライフル式にガンアローを合体させる。

『レイフルガント型』… 限られた時間ではあるが、弾がその場に

留まる。

時間が経つと再び停止前のスピードに戻る。

『ニキータ型』…追跡型の弾を一発のみ、発射する。威力の大小は変化させる事が出来、

大きさと威力は比例する。（デカければ威力も高くなる）

等、様々な打ち方が出来る。

自分も人間を止めているからなのだろうか、

主人公の事を「今までのキーブレードの使い手に比べると随分とお粗末」と評している。

主人公が最強では無かつたら…考えるだけで恐ろしい。

No. IIII 称号：旋風の六槍（Whirlwind Lancer）

属性：風 武器・ランス 配下ノーバディ・ドラグーン

武器は「ランス」、合計六本の槍による長いリーチを生かした連續攻撃をしてくる。

片手に一本、もう片方に一本持つ。他の三本はそれぞれ、風の力で身のそばに浮かせている。

攻撃の際に主人公に向けて、扇状に放ち、突く。それか、六本を同

時主人公へ放つ。

槍がそれぞれ襲いかかってくる事は無いものの、突如上空から表れ、奇襲する事も出来る。

そして厄介なのは、N.O.・?自身が絶えず風のバリアが張られていて、主人公が接近して攻撃しようものなら、

逆にダメージを受けてしまう。おまけに、何故か魔法までも弾かれる。

バリアを一時的に消して、ダメージを取る為には、特殊コマンドを使わなければならない。

(コミットカット版のみ)

無論、風の刃を利用した攻撃も。

覚醒技は六本の槍を変形させ、竜のようにして、その口から暴風を放つ、「絶望の風」。

今小説では、上に書かれた物と殆ど変わらず。
「絶望の風」は変形して竜が完成するまで射出出来ない。故に隙だらけ。

その代わり広範囲撲滅兵器に分類され、威力はとんでもない事になる。ハイリスクハイリターン。

六本の槍がどうすれば竜の頭になるのか解らないが、体の大きいN.O.・?が割と余裕で乗れている所から、結構な大きさを誇る。

自らが「生み出した」風の性質を変化させる事が可能で、刃のように切り裂く風にも、ただ、敵を吹き飛ばす風にしたり。一瞬にして30メイル程の竜巻を発生させる事も可能。無論、30メイル以上も可能。

N O . I V 称号：じてつく学究 (Chilly Academy
mic)

属性：氷 武器：シールド 配下：ノーバディ・-

武器は「シールド」文字通り、体を守る為の盾で、N O . 4 の前に
絶えず浮いている。

シールドによつて前方からの攻撃をすべて無効化させる事が出来る。
耐久度が一応あり、破壊する事で N O . 4 にダメージを与える
ようになつてゐるが、時間の経過と共に再生する。

氷を用いた攻撃は、氷結の刃を作り出し、地を滑るように対象を追
いかけ、切り裂く攻撃の他に、

覚醒技は二つ、全てを眠りへと誘う（？）絶対零度（？）の吹雪を
起こす「ダイアモンドダスト」

二つ目は氷塊で極限まで対象を凍りつかせ、氷山を突き上げ粉砕す
る「アンサンブル」。

学究の名に恥じない技もある。

展開した魔方陣（ノーバティーマークを円で囲つたような物）を主
人公の下に張り付かせ、

情報の解析を行い、吸収を終了、主人公のクローンを生み出し、放
つてくる。

他にも、戦闘では出でこないが、本人とソックリそのままのクロー
ンも生み出せる。

（ と い つ て も 、 アンチモード と い う 主 人 公 が 稀 に な る 変 身 状 態 の タイプ が 襲 い か か つ て く る。 ）

今 小 説 で は 、 特 定 範 囲 内 （ そ れ ほ ど 広 く は ない 。 自 衛 に は 困 ら な い 程 度 の 範 囲 ） を 突 如

凍 り つ か せ る 事 が 出 来 る 事 に 加 え 、 氷 に 対 す る ? 耐 性 ? が 出 来 る。
(寒 さ を 感 じ な い 、 凍 り つ か な い 等)

逆 に 、 火 な ど 高 温 を 誇 る 物 に は 滅 法 弱 い 。 盾 も 火 に よ る 攻 撃 に は 直 ぐ に 壊 れ る。

基 本 戦 法 は ヒ ッ ト & ア ウ ェ イ 。

氷 結 の 刃 で 対 象 を 追 跡 さ せ 、 接 近 し て き た 武 器 や 攻 撃 を 盾 で 身 を 守 り つ つ 回 避 す る 。

そ し て 魔 方 陣 で 対 象 の デ ー タ を 解 析 、 分 身 を 作 り 出 し 、 援 護 さ せ る 。

能力レポート（後書き）

これできんじやね？

つていう能力応用法もある程度、考えています。

なにかアイデイアがあれば、感想で書いていただければ助かります。

No.1 「プロローグ」(前書き)

どうも軽い雪です。

一度間違つて短編で投稿してしまつたプロローグです。w
ご指摘してくれた方、ありがとうございます。

では、どうぞ。

No.1 「プロローグ」

「知らない天井だぜ」

「ほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。只の何処にでもいる高校生だ。…多分。現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。つてところだ。」

『大丈夫ですか…？色々な意味で。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や？」

神だ！目の前に神がある！何か神秘的なオーラがスゲエ！

『一度何処かでお会いしましたか？心あたりは無いんですけど…』

「いや、違う。…といつかモノローグもとに俺の思考読むなんてお前神だろ、」

『そうですか、…まあそれは良いとして』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！…やつぱりテンプレか！』『ほん。』おっと。

『すいませんでしたあ…』

わーお、見事な土下座だねー…そりいえば、【土下座】ストラップとかあつたな。

何氣ストラップはやつてんだよ。m ソフレンドの筆箱にジャラジャラ。シークレットもあつたな。

ん、過去を思い出してたけど氣にスンナ。

それは兎も角、田の前で土下座しているのは割りと若じ姿をしている自称神。

つて追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…までよ、でも俺の死因、溺死じやねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。

トラックに吹き飛ばされてスプラッシュな筈だから！

因みに人間つて首ぎつちよんしても、

血が流れている数秒　それこそほんの数秒だが、生きてんだぜ！？
あれはトラウマもんだわ。というか吐いたな俺
まあ、バラつてたから無理だけど。

『そこで私は……私の上司なんですが、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほど。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にもしがみつくぜ。
つまりは俺もその一人つてわけだ。まあ、特に未練もないからこ

な平常心でいられるんだろうけども。

人生何となく生きていただけだしなあ……。

『元の世界には無理です…すいませんけど、それが捉となってるの
で…。』

「はあ、して、その捉つてなんぞ？」

つまりは、俺をもとった世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらしい。
それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、田の前の神様、
顔青くしてたよ。。

よつまびに酷いことが起きるんだな。すげー気になるぜ
正直、納得の?な?の字もたいして出来てないが、生き返られるな
ら結果おーらい。

「んでも、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよ?」

『えっと…簡潔にしてえば、平行世界に転生してもうれます。』

「えつ、えうと…パラレルって何ですか?」

『想像の世界、もつ一つの世界、まあ色々な呼び方はありますね。』

「えつと…じやあ、本の世界とかも有りなのか?」

はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。
どうせ楽しむなら、楽しもつ。そして一番気になる部分、お願い
をどれほど聞いてもらいたいかは…。

『CAPTUREは4つまだですね…私より上位の存在になれば、
まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がする。」

ひやつせー！

お願い!と叫びます。

なりばどんなお願いをするか。

あー、こりこり時つて、じざとなるとどんちーと迷つか
な…。

ところが、チートの基準がわからなーし、それじこバトル漫画も
少しも持つてねえ。

「ハーン…なり一個田せ…。」

一個田。

思ついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からZ.O.・13・

N.O.9の能力を得る、というものだつた。

しかし、神様の『機関全員の能力を使えるよつにじときますね』との一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしく。

二個目。

一つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足！」と草薙君ボイスが響いたのだが、どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。ダスクからトライワイトゾーンまでなんでもござれだ。：確かにノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ気にしたら負けか？

三個目。

とりあいす、不老にしてもいいことに。

これで、好きな時まで生きられるし。さすがに不死は気がどうにかなりそうだからな。

四個目。

姿をN.O.・13の姿に。

なんだかんだで好きなんだよねN.O.・13。

うん、僕、満足。

ついに旅立ち時が来たようだ。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です。』

「え、それって何処　うわえああああい！」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、氣づくと謎の穴にまつさかさま。

どうやら世界は選ばせて貰えないらしい。畜生。

嫌な予感しかしない俺だった。

『あり……やついえばノーバティーって不老だったはず……後でお詫びと罰加えなくちゃなあ……。』

又もや神が失態を犯している事に気づかず。

No.1 「プロローグ」（後書き）

色々と可笑しい部分も出てくるかもしませんが、がんばります。

誤字や認識の間違いがある部分は報告していただけるとありがたいです。

それでは。

(2011.11.25 一部内容変更)

10 / 20 神様の最後の一言追加。

No.2 「転生、そして能力詳細」（上）（前編）

ゞいつも、軽い雪です。

今回は、転生と機関メンバーの能力について、です。

ノーバディー創造の部分はゞしきょうかと思つてゐるんだよね…。
あんま長い訳じゃないですかゞ、色々と整理したいと思つてゐるの
上下分けました。

名前にについては深く考へないでくださいw

No.2 「転生、そして能力詳細」（上）

これはトリステイン王国内のとある村。

その小さな村のひとつの家。

「生まれたぞ！」

「わー、すうーいー！」

その家で、一人の男の子が生まれた。

卷之三

その子供の名前は「ヴァン」。
産声を上げるその子は
。

「 ナニ も わからぬ もの。 (なんにもわからぬ) 」

転生した村雨、その人だつた。

俺だ。村雨だ。
意意識が無くなつたと思つたら、次、目を覚ました時はこいつなつてた
んだ。

畜生、あの神、急に俺を急かしたのはこのせいか！

「リーナ、見ろよ、俺たちの子供は無事に生まれたぞ……。」

「え、ええ。私たちの子ね。…ふー…疲れたわ…」

どうやら声の主が俺の親らしい。

つまりは俺…村雨は赤ちゃんに転生したらしい。

あれ？ 確か、お願いの中に、「不老」あつたよな？ 大丈夫か？
(大丈夫ですよ。一応、見た目それなりの大人で止まるよ)にして
おきました。)

あれ、答えてくれた。

まあ、とりあいずにこれで一生赤ん坊、とかいう詰み状態は回避でき
た。

しかし、そろそろ赤ん坊の本能(?)で叫び続けたので疲れた。そ
れに、眠くなってきた。

「おぎやああう。(ねーむー。)」

そして俺も母となつた女性の腕の中でこの世界初めての眠りについ
たのだった。

キングクリムゾン。

ぶつちやけ、五年程時を飛ばせせて頂いたぜ！

赤ん坊の毎日は発揮しつつ退屈だらうからね！

さて、現在五歳の俺は、周囲に愛されて育つ事が出来た。

直ぐに立つて歩いたり、少しだが話せるといつ成長の早れに、両親と周囲を驚かせた。

正直、後から、これつて異常な見せて良かつたのか？と、不気味がられるかと内心ヒヤッとしたが、思いのほか抵抗がないらしく、いまも変わらず普通の子供として扱つてくれていた。

この村はセンチュエル公爵といつ貴族が治める領地のひとつで、他の北村、西村などとまとめて、「センチュエル領」と呼ばれているようだ。どうやら、貴族や平民、そういう隔たりがあるところを見ると、割と昔な時代らしい。

そして、この世界には、御伽噺ともいえるような物が存在していた。

「魔法」だ。

会話で飛び交う「魔法」という単語に、俺は毎回聞き間違いかと思ひ首を傾げていたのだが、実際に母が魔法で物を動かしているところ

ろを見て、信じざる終えなかつた。

にしても。

実際、魔法使いが出るよつな小説や漫画で【ゼロの使い魔】といつ
タイトルは聞いたことが無いな。

ハリー・ Potterとかなら…まああれは有名だしな。

「まー、いいかあ。」

実際全然良くないのだが、まあ田的の一ツ「平和に生きる」という
目標は達成したい…と思うな。

あー、でも魔法使いの世界に来たのだから、無論、魔法は使いたい
と思つ。

魔法使いになれるのは最初から決まつてゐるらしく、両親、または
先祖に魔法使いの血を持つものがいないと使えないそつだ。
平民にはその血が流れていらないものがほとんどで、魔法が使えるの
は貴族の者たちがほとんどだそつだ。

まあだから、貴族と平民という格差があるんだろうな。
この世界では魔法は圧倒的らしいし。

因みに、母はメイジであるのに、何故貴族でないのかといつと、没
落貴族なのだそつだ。

そこで平民である父と出会い、今があるらじ。

で。

肝心の魔法適正とこえば…。

「せんせー、杖契約つてどうあるんでせう?」

「何いひてゐるのガーン。…まあ、もう一度よ。」

母に契約の仕方を教わるも、それらしい反応すら見せない始末。
…おい、父ちゃんなんでホッとしてんだ!?

「良いじゃないか、リーナ。杖契約だつて何週間もかかる奴もいる
らしいじゃないか。」

ふーん、そうなのか。

でも、それつていつか使えるって事なんだよな。それじゃあ別にホ
ツとすることでもないような。

「それじゃ、『魔法が使える』ってだけで、仲間はずれにされるかも
しれないだろ?」

「流石は我が父…そこまで考えてください」とは…。

「それもそうねえ…、でも我が子がどれほど魔法が使えるかと思つ
と、わくわくしない?」

まあ、僕も気になる事は気になるけどね、と子供のよつこ田を光らせる母を見ながら苦笑する父。

どっけかとゆーと、夫婦つてよりも、兄妹みたいだな。

さて、魔法のこととは兎も角、与えられた能力のほうを試していたのだが、具体的に判らないことが多すぎる。

何故判らないのかというと、単純に人目を忍んで実験するタイミングと身体がこの5年間、無むざぎた。

「しつかあああつしー今こそ、実験の時が来たのだ！」

静寂。

所変わり、現在俺は村の近場にある森へと来ていた。

無論秘密の実験なのでギャラリーは居ない。：始めるか。

さて、今回始めに試したい事は決まっている。

『ノーバディーを創造できる』これをやってみようと思つんだ。

ただ、少し考える事があつて、『創造する』事は出来るが『従わせる』事が出来なければ意味が無い。

ノーバディーに襲われて死ぬとか、ありそうで怖い。

「…やつぱ、機関メンバーの能力のほうがいいか…。」

とこう事でれつとじらい。

おつと。

その前に、ここで機関メンバー毎の武器を紹介。

N O . 1 . ライトセーバー二刀流。腕から直接赤いのが出ていた。
武器の正式名称は「エリアルブレード」。

他にも軌道が様々なビームや分身など。属性「無」

N O . 2 . クロスボウのような武器から、ビームなどを放つ事が出来る武器。武器の正式名称は「ガンアロー」。重力を無視した逆さの状態になれたり、瞬間移動、空間変異、腕だけ転移させる事も出来る。属性「空間」

N O . 3 . 特殊な形をした槍。本人は風の力を操り、六本同時に扱っている。武器の正式名称は「ランス」。

槍を竜のように変化させて暴風を放つたり。属性は勿論「風」。

。

N O . 4 . 主に氷の力を凝縮させた盾。（本人は科学者で戦闘に向いていない。）武器の正式名称は「シールド」。氷結の刃を作り出して敵を切り刻んだり、氷漬けにしたりする事が出来る。属性は「氷」

氷

N.O.・5・巨大な斧のよつた大剣を用いる。武器の正式名称は「アツクスソード」。

武器を直接振るうは勿論、投げつけたり、地面を隆起させたり、機関一の怪力を誇る。属性は「土」

N.O.・6・本など、「魔術書」のような物を使う。正式名称は「レキシコン」。幻術で敵を翻弄、幻術世界に捕らえる事も出来る。武器をコピーする能力も持ち合わせている。属性は「幻」

N.O.・7・大振りな剣を使つ。武器の形状はどちらかといつとメイズやハンマーに近い。正式名称は「クレイモア」。月の力を浴びると「バーサーカー」状態になり、武器が展開したり、口調が荒々しくなる。属性は「月」

N.O.・8・棘がついた手投げ武器を二つ使う。戦闘では常に炎を纏わせていた。正式名称は「チャクラム」。手裏剣のように投げつけたり、乱舞のように投げ敵を燃やしちゃくす。炎の牢獄を創り出す事も可能。属性は「炎」

(チャクラム(チャクラ)は古代インドで用いられた投擲武器の一種。戦輪、飛輪や、円月輪とも呼ばれる。真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられており、その直径は12 - 30 cm程。投擲武器としては珍しく斬ることを目的としている。投げ方は一通りあり、円盤の中央に指をいれて回しながら投擲する方法と、

円盤を指で挟み投擲する方法がある。 b yW i k i ()

N O . 9 : ギターのような楽器を使って、水を操る。武器の正式名称は「シタール」。

強く掻き均す事で、無数の巨大な水柱を発生させることも可能。属性は「水」

N O . 10 : トランプカードを使う。柄はノーバディーマークが描かれている物。武器の正式名称は「カード」。敵をサイコロ、カードに変えたり、自身がカードの化けたりすることも出来る。属性は「時」

N O . 11 : 身の丈ほどもある鎌を使う。武器の正式名称は「サイズ」。『死の宣告』や、鎌を連続で振り回したり、敵を追跡する禍々しい力を放つ事が出来る。属性は「花」

(*) の死の宣告は、原作では主人公の 1 ヴでカウント数が決まり、攻撃を受ける事にカウントが減る仕組みになっている。)

N O . 12 : 指の間に複数挟めるほどの大さのナイフを使い、電撃を操る。武器の正式名称は「ナイフ」。

テレビポートや * 分身、電撃、両腕から巨大な轟雷を放つ事が出来る。属性は「雷」

(* 分身が受けたダメージは本体にも入る。N.O.・1の分身や影分身などとは違う扱い。)

N.O.・13・鍵の形をした剣を使う。光の柱を剣から発生させることが出来る。武器の正式名称は「キーブレード」。戦闘では殆どが二刀流で光の柱とも交えたコンビネーションで戦う。属性は「光」

うーん…一番気になるのはやっぱキーブレードだよな。
二刀流なのかそれとも、一本なのか。
さて、ヒ。試してみるとしますか！

(下に続く)

No.2 「転生、そして能力詳細」（上）（後書き）

改めてみると、「期間メンバーの能力ってチートだよね……。説明不足かもしれないけど、後々能力使用の時に説明すると思います。」

（2011.11.25 能力レポート追加）

誤字、認識の間違いがあればお知らせください。

No.2! 「能力についての実験 下」（前書き）

更新は不定期になる…かも?

出来れば、一日一話…いや、一日一話を目指したいなあ…。

No.2!「能力についての実験 下」

下

キングダムハーツの主人公は、14歳でキーブレードを振るつていた。

まあ、単純に何が言いたいかというと。

「…「うぐぐぐ、重い…」

5歳と14歳では筋力が圧倒的に違う。
…これは鍛えないと始まらないなあ…。一本を軽く振るつてたとか
尊敬するわ。

キーブレードつていうと、初期武器なんかを見る限り、軽い、つて
いうイメージがあるんだよな。

ほら、王様（夢のねずみ）とかだつて振り回してたし。

どうやら、キーブレードは一本のみのようだ。
…原作じゃ覚醒イベントが起きてから初めて一本になつたんだよな
…。
俺も覚醒しなければ使えないのだろうか。

それは兎も角。

使用者に合わせて重量が変化するとか都合の良い事は起きない訳で。仕方なくキーブレードを元に戻すと、他の武器にする事にした。

「エリアルブレードか…？あれは持つていつより、腕から出でる、つて感じだしな。

あれが、エネルギーで生成されてるから重く無かつたりするかも…。」

他にも、カード（Ｚ・10）やらナイフ（Ｚ・12）でも良いかもしねれない。

見た目的にはどちらも軽量武器だからな…カードが武器かどうかは兎も角ではあるが。

一つ気になるのは、殺傷能力だ。

全年齢対象のゲームなので、無論死亡シーン等、グロが無いだけに、本来の殺傷能力が分からぬ。

確か、キングダムハーツには『死』という概念は無いんだっけか。

「まあ…別に人を殺したいなんて思わないからそっちのほうが楽なんだけどなあ」

能力を使う方法は、機関メンバーの称号を唱える事で出来ると、神に一応言われている。

【狭間の指導者】

これはN.O.・1の称号だ。能力使用に至つては、別々の称号があるので、使い分けなければならない。

ブォン、というライトセーバーが立てる音と同じ音と共に両腕に赤い鮮やかな光を放つブレードが現れる。

手の甲に現れるノーバディーマークを中心に、モノクロ色の茨が浮かび上がっている。

「つま…生ライトセーバーが見られる日が来るのは…か、感動だ」

スター・ウーストーズを見れば、誰でも一度は夢を見たはず。試しに腕を上下に振ると、ブォンブォンと、音が経つ。段々楽しくなり、テンションが上がっていた時。

ジユッ

「うむ。」

落ちてきた葉がエリアルブレードに当たった途端、溶けるように消えてしまった。

……えええええー！？

どうやら、エリアルブレードに殺傷能力（人を殺せる威力）あるようだ…といふか、下手したらといふか下手しなくても扱い次第では自爆しそうだよな…？なにこれ怖い。

正直、これが自分に当たつたらと懸念トランシジョンが一気に下がつた。

取り扱い注意すぎる。

「と、といあいす、解除。」

スッと音も経てずに消えるエリアルブレード。俺はそこでホッと、一息吐いた。

この様子だと、他の武器にも殺傷能力はあるのだろう。…護身には

十分だけど、できれば使う時が来ない事を祈るばかりだ。

と、その時。

ガササツ！

と、何かが茂みの向こうで動く音がした。

…やうえ、見られたか！？…でも、こちらに近づいてるような気が

…。

俺は咄嗟に近くの茂みに身を隠した。

ズシン、ズシン、と『何か』の足音が聞こえる。

この音は…人

間じゃない…？

「ブヒイイイツ！」

まもなくして、『ソイツ』は茂みから出てきた。

人間に近い大きな胴体に豚の頭。そして、筋肉隆々の太い腕。

そして木を荒削りして作られたと思われる、これまた太い棍棒。

おい、今変な想像したやつ、自重しろ。

ともかく…

「…オーク…？」

そう、オークだ。知能は低く、行動パターンも単純な亜人と言われる種類であるが、その図体から見ても分かるように、獲物である棍棒で繰り出される攻撃は凄まじいという。

彼らの主食は肉で、動物の物は勿論、人間のものまで食らう。

人間の子供の肉が好きと言われ、正直、絶対見つかりたくない。

見つかれば、最悪、生きたまま食われる可能性がある。

子供の足では逃げ切れる筈もない…俺は村に引き返すべく、静かに歩を進める。

…しかし、現実とは非情な物で…。

ゴツ、

「ブヒツ！？」

「うげえ！？」

木の根に足を引っ掛けた瞬間に音を経ててしまった！

無論、それがオークに見つからない筈も無く、その日は正確に俺を捉えていた。

不味い…こうなれば逃げ切る事も出来ない。

何故か非常事態にも関わらず落ち着いている事に感謝しながらも、策を頭で考え始める。

能力で対峙しようにも、一撃でも相手の攻撃…あの棍棒が直撃してしまえば、ミンチに化してしまいそうだ。

避けきる自身もないのに、接近するのは避けたい…。ならば。

「（「うなりや、ガンアローでも使つか！？…だが…もし当たらなかつたら？」）

実際、銃なんで一度も手にした事も無ければ、打った試しなんてあるわけが無い。

そんな素人が目の前の巨大とはいえ、オークに当たられる自信はない。

「ブヒィイイツ！」

「う…ガンアロー以外じゃあれをやるしかねえか…一か八かだ！」

大好きな人間の子供にあり付けるかもしれないのだ、そんなチャンスをオークが見逃す筈があるわけが無く、
オークは雄たけびを上げると、歩き寄つてくる。

「出て来い！サムライ！」

そう。ノーバディー創造である。

これで、田の前のオークを倒せるか兎も角、時間稼ぎが出来る筈だ。

そして。

虚からシャキン、と鞘から刀を抜く音と共に、助つ人が現れた。

サムライというのは、目の前のノーバディーの種類の一つで、No. 13の配下ノーバディーにして上位の強さを誇る一体だ。

その容姿は、侍が着るような袖の長い服を着て、全身が薄く藍色がかっている。一見、刀を一本指しているので「一刀流だと思うだろうが、実は背後で重力を無視したように浮かぶ『鞘』も同時に扱う、四刀流の使い手。

この侍が俺に従ってくれる事を願いつつ、

「田の前のアイツを倒してくれ！」

と命令、というかお願いをしてみた所。

「……（クン）」

やつたああ！頷いてくれたあああ！

一か八かは成功した。…これでサムライが頑張ってくれたら助かるなんて、俺の考えが甘かった。 良い意味で、だが。

「ギッ！？ギィイイイ！」

「…」

突然のサムライの出現に驚いていたオーケーだが、目の前の存在が敵

だと分かるや否や、棍棒で仕留めよつと振り下ろす。

「ブウォン！」

が、それはサムライにヒットする事なくすかぶつた。

「あの音からして、当たつたらひとたまりもないな…。」

バックステップでフワリと飛ぶように避けたサムライは、柄に手をかけ。

シュシュシュ…

ゆっくりと、引き抜いた。

鞘から引き抜かれた、愛刀（？）は日の光を反射して、鈍く灰色に光る。

「ブヒイッ」

棍棒を構えなおしたオークは、相手が武器を構えているのを見るのはや

「ボオン！」

再び振り下ろす。

サムライはそれを避けようともせず、抜刀した状態で立たずんでいる。

「あ、危ない！避け」

サムライは腕を素早く動かしていた　目に見えないほどのスピードで。

「ブギイツ！？」

音も無く振るわれた刀、それは振り下ろされようとしていた棍棒を叩ききつていた。

ゴドン、と鈍い音を立てて真っ一いつになつた棍棒。

巨大な木を荒削りして作ったような太いものが、一振りで切られたのだ。

「…、以外と鋭利…。」

逃げる、という行動が頭から離れるほど、鮮やかな太刀使い。俺はそれに見とれていた。…否、見とれる事しか出来なかつた。

「ブギイイ！」

獲物が使い物にならなくなつた事に怒つているのか、乱暴ではあるが、先ほどよりさらに鼻息を荒くしてサムライに掴み掛かる。

サムライの鞘がその腕を殴打して、オークが一瞬、一鳴きして怯む。

その一瞬。

「ブヒッ

この大陸では見られないはずの、桜の花びらが散るような幻影が見え…次の瞬間、サムライの姿が忽然と消え、オークの背後に現れる。パチン、と鞘に刀を収める音と共に、オークの上半身と下半身が別々に崩れ落ちた。

「うえ？… む… むう… えええ」

それまで、見とれていた俺だったが、何かが液体が顔に掛かるのを感じた。

勿論、オークの大量の血と肉を見た俺は吐き気を催していた。頭が豚の怪物だとしても、例え俺が直接手を出した訳じゃなくとも…。

結局、耐え切れずに、嘔吐リバースしてしまった。

数分が経ち、俺は漸く落ち着つき始めていたが、まだあの光景が脳裏から離れない。

これ以上考え事も止めて、早く家で休みたい気分なんだけど…。

「……」

隣で、命令を待つ従者の様に佇む者…先ほど創造した、サムライ。彼（？）…他のノーバディに共通して恐らく、喋れない。無論、そのどちらかといえば人間の物ではない頭にも口と思われる部分が無いし。

ん？待てよ…でもダスクって喋つてたような？

まあいいか。と、俺はサムライを改めて見つめる。

何故か、あれほどのオークの血飛沫だったのに、体所か、刀にすら

なにも掛かっていない。

俺はその事に繭を潜めたが、まあ今は別に良い…血は見たくなかったし。

これ（サムライ）を如何するか、それが問題なのだ。
創造するだけ創造したもの、還し方は無い。

と、なれば、必然的に隠さなきやならない。
隠しておける場所なんて、この森ぐらいしかない。

いつその事、

『森で拾つてきたーー!』

「…ないわ。」

怪しそう見る。

万が一…ありえる訳が無いが、親が受け入れてくれたとしても、村
は違うだろう。

とりあいず、サムライには『森で人に見つからないように行動[』]
してくれと、頼んでおいた。

…これで多分大丈夫だ。

この森は資源に向いた木が少なく、立ち入りも他の方角にある森よ
り圧倒的に少ない。

しづらくは、秘密基地のように使えるだらう。
と、なると、ここで鍛錬するか？家族に見つからぬようすみづかべ
きなのだらうし。

強くなるにしても…単純に能力無発動でもある程度戦えるようにな
なればならない。

それ以前に武器を振るう力がないと技術も磨けやしない。

「うん、筋トレになる事はじめなきやな」

この後、帰宅したら、体中泥だらけのと、時間も遅かったため
じゅっぴんぐにせられた。

平民である俺の日常は続く。

No.2! 「能力についての実験 下」（後書き）

うーん、機関やノーバディにはまだ謎な部分があるやん。

そして、サムライ無双。

やっぱり、自己解釈や想像が入ります。

一応、オリ主にいづれかキー・ブレード一本を持たせたいな、と思つてます。

No. 1 「ノーバティ、十三機関について。」（前書き）

いつも、軽い雪です。

今回は、「ノーバティ」を知らない人向けにがんばって書いてみました。

にしても、どう物語を進めるか計画を立てないといけないなあ。

No.1「ノーバディ、十三機関について。」

【ノーバディーとは?】

闇に心を奪われてハートレスになつた人間が強い心や思いを持つていると、稀に生まれ落ちことがある生物。

(闇=ハートレス=また別の敵キャラ)だと考えていただければ良いです。

通常、キングダムハーツの世界では、ハートレスに心を奪われると肉体と魂（心とは別）も消滅します。
然し、冒頭でも書いたように、強い心、思い等を持っていた人物がハートレスに心を奪われると、稀に肉体と魂（記憶？）が異なる世界で残る事がある。

それが、ノーバディ。

体の形は人に近い形になつてている者が多く、（サムライもそれに当てはある。）色は白や銀の部分が多い。
ハートレスの殆どが、丸みを帯びた形に対して、ノーバディーは角ばつたり、鋭利な形をしている。

光でも闇でもない（一つは裏と表のよつにハッキリしているため強い）狭間（無）に近い存在で、
ある程度短い間行動できるだけで程なく闇に溶けてしまつ（実際に溶けるのではなく、「闇に消えてなくなる」という意味）。

然し、戦闘能力が低いのかと言えば、そうではなく、一個体ではハ

ハートレスよりも上で強い。

動きは様々で、一見、心を持つてているかのよつた感情的な動きをするが、心は無い。

実際にゲーム中でも「存在しない者」「誰でもない者」「抜け殻」と言われている。

（関節や重力を無視したような動きをするため、プレイヤーの一部からは不気味がられている。）

ハートレスが心を求めて本能で動いているのに対し、ノーバディーは知性を持つて行動する。

また、体の何処かに、ハートレスに付いている、ハートの「エンブレム（マーク）」のように逆さまにしたハートと十字架を組み合わせたような形のシンボルマークが付いている。

これは「心が無い」という事を表すそうだ。

存在しない者という呼称からか「死」という概念はなく、その最期には「消滅」という語句が用いられる。

【十三機関　『正式名称：XIII機関』】

人がハートレスになる時、特に強い心を持った者は、人であつた頃の面影を残したままノーバディとなることがある。

XIII機関はそのような13人のメンバーで構成されている組織で、下級ノーバディを支配・統率しながら、目的を達成するために数々の世界で暗躍しているようだ。

特徴としては皆同じ黒いコートを着ていて、それぞれが専用の武器・司る属性・専属の配下ノーバディを持ち、人間だった時の名前に異端の証である「X」を足してアナグラムにしたものに新たな名前としている。

感情があるような振る舞いを見せるが、実際は心を持たないため、人間だった頃の記憶に基づき感情があるフリをしている。

ナンバーは入った順に決められ、リーダーである『ゼムナス（Zemnas）』は無論N.O.・1。なので、番号が若い（小さい）ほど、昔からいるメンバーといふことになる。

正規メンバーではない。ナンバーと実力は必ずしも一致している訳ではなく、ナンバーが若いからといって機関内での立場が高いとは限らないという。

（それを表しているかのように、十三機関で一番最初に倒されたのはN.O.・4の『ウイグセン（Wigen）』だった。）

ノーバディは年を取らないため、機関員の年齢はノーバディになつた時点での外見年齢のままになる。

公式で解っているのはN.O.・13の『ロクサス（Roxas）』のみ。

因みに、機関にはもう一人、正式ではないメンバーが居る。

基本的にN.O.・13と同じ光属性を司り、キーブレードを使つ少女。

能力としては殆ど被るので、小説内では出ないかもしません。因みに、N.O.・13がキーブレード「刀流へと覚醒したのは、彼女が関係しています。

正体は「レプリカ計画」に基づいてN.O.・4が作成したレプリカ人形の一つで、N.O.・14はその中でも一番の成功作「N.O.・1」である。

そのため実際はノーバディですらなく、それが理由で機関のメンバーとしては正式にはカウントされていない。

【今小説での能力設定】

「機関メンバー全員の能力使用可能」

N.O.・1～N.O.・13までの機関メンバーの能力を使う事が出来る。重複は現時点できれいに不可能で、予定はあるが、同時に一人分まで重複できるようにしたいと思ってます。

何故シオンを今含まないかといふと、正式な「機関メンバー」ではないので。

それと、機関N.O.・5の武器、「アックスソード」についてですが、これ、名前からもわかるように重量武器なんですね。「キーブレード」一本まともに振れないのにまともに使えるようになるのは何時になるんだよ、ってな感じになりまして、「能力」としてその馬鹿力を発揮できるようにしようと思います。

：良く考えたら鎌とか槍とかも難しいよね…。まあこれらはなんとかして持てるようになります（汗）

(機関の登場作品は、「KHC0M」キングダムハーツ「KHC2」ファイナルファンタジーII「KHC358/2」ファイナルファンタジーミックス：一応N.O.・1だけなら「KHC1FM」にでも隠しボスとして出てましたね。

「358/2」では機関メンバーであるN.O.・13が主人公で、他の機関メンバーも操作できます。

なんというか、「358/2」は手元に無い上、プレイしたのも大分前だったのであやふやです…。w)

機関は全員が共通して「FFを元にした魔法」ファイナルファンタジーが四種類使えます。

・ファイア　・ブリザド　・サンダー　・ケアルガ

エスナ等、それらの魔法は無いようなので、実質存在するのは上四つだけ。

(といつても、KHのまほう(KHでは魔法とは呼ばない。)は、FFの物とはエッフェクト等が違う物です。)

その他にも「マグネ」や「ストップ」などという魔法がありますが、機関メンバーは使用していません。(恐らく。)

なので、オリ主も機関の使えないこの魔法は使えないことにします。

「ノーバディーを創造する能力」

本来、ノーバディーは「心の強い者がハートレスに心を奪われる」という条件が必要ですが、この小説では、それを取つ払つてます。

ただ、この能力は、その機関メンバーに「配下」と言われる専用のノーバディーが居る場合、そのノーバディーしか創造できません。

逆に機関メンバーの能力を使ってない場合は、どんなノーバディーでも呼び出せると言う事です。

小説内では既に、ノーバディーの種類の一體「サムライ」が出てくれています。

因みに、小説内で主人公が内心考えていた「ダスク」というのは、ノーバディーの中でも一番目に弱い下級のノーバディです。

他に、さまざまな種類のノーバディが存在しますが、それは本編で。

因みに主は「サムライ」が好きなので登場回数が一番多くなるかも（あ

「？？？？」

不老に変わり登場する能力です。

後付になる予定ですが、いまもその能力は決まってません（汗）

【本小説における、オリ主の立ち位置】

最初は「ノーバディーの能力を得たオリ主がルイズに召還される」という物でした。

しかし、そうなると、本来呼ばれるはずである「サイト」君が登場できないんじゃないいか、という問題に当たりまして。まあ、今おもえば、「一人同時召還」という手も在ったのですが、

ガンダールヴとかジー・ジョウ。って感じになるような。

近々、「ルイズ召還」verも一話だけ特別話として投稿してみようかと思つています。

さてさて、この小説での立ち居地は作者の予定では

「近い場所でルイズ達を見守り、原作で起きた悲劇等を回避する手伝いをする」

といふ、案外地味な立ち居地となつていています。

実際、もっと派手な立ち居地になりたいというのもありますけど、原作よりハッピーな展開をサイト、ルイズ達と繰り広げたい、とう思いもあり、「召還」verではないこの立ち居地になりました。

「貴族から始めれば（に転生すれば）、教師になるなり出来て楽なんじやない？」

無論、その設定で行くのも考えましたが、

誕生 魔法教育 学園生活 成人 先生 … 大分大雑把にしましたが、先生になるまでに踏むステップが多く（自分からして）

「これ、続ける自信ないな…。」と、思わず苦笑い。これを書いた他の作者様を尊敬しました。

自分としては、原作に早く突入してえーつて、我慢できるわけがないので、平民にしましたw

「おいおい、待てよ、平民で行くならいいとして、どうやってルイズ達を見守れる場所に落ち着くんだよ？」

実はこれ、相当迷いました。実際、トリステイン魔法学院に居る平民の人たちってメイドだと、コックとかしか居ませんよね？

（実は作者、アニメにしか見ておらず、おまけに小説は『外伝 タバサの冒険1』しか持っていないといつ。）

（2011.11.25 警備員もちゃんと居るみたいでしたw
出ませんけど（・・・））

今の候補としては、警備員、って所でしょうか。
…無計画すぎて俺が泣く。　「都合主義でも起しきなればならないか…。

まあ兎も角、長々といひまで読んで頂いた方、有難う御座います。

20・！「ノーバティ、十三機関について。」（後書き）

誤字、認識の誤りがあつましたら」報告ください。

2001「もう一つの始まり方」（前書き）

はい、今回はルイズに召喚される、「召喚」เวーです。

何故かこいつらのほうが書きやすいといつ事態。…うほあ…。
ひょっとすれば続くかもしない。

因みに、サイト君が出ないバージョンでもあります。

NO.0 - 「もう一つの始まり方」

ドサッ。

「ち、ちくしょう…覚えてるよ…」

長い間、あの神から落とされた穴の中を漂っていた俺だが、不意に
なにか「引っ張られる」…いや、「吸い寄せられる」のを感じ、目
を開くと田の前に迫る「鏡」と思われる物。
そして、視界は真っ白になつたと思つたら、草むらにぶつ倒れてい
た。

「おい、ルイズの奴、人間を召喚しやがつたぞ…」

「フードを深くかぶつて解らないな…」

騒がしい。

どうやら俺は声からして、少年少女に囲まれているようだ。
一応神は気を利かせて、服を着させていたらしい、少し感謝
しよう。

俺は今だ平行感覚が取れないまま、ノロノロと起き上がりつた。
視界がブレる。此処は一体何処なんだよ、確か…

「先生、もう一度、やり直しを…」

「駄目だ、ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは神聖な儀式。やり直しは受付られない。」

「そんな…」

なにやら、視界の先で中年の男性と少女の声が聞こえた。

「サモン・サーヴァント？」…サモンってゆーと、あの召喚サモンだよな？

とこの事は俺はあの少女に召喚されたと言つのか？…んな馬鹿な…。

「アンタ、何者よ？」

少女の声で思考から現実に引き戻される。視点も漸く定まるようになつてきた。田の前のピンク色の髪少女が話しかけてきたりしい。

「俺は…」

村雨、と言つとして、もう一度口を開じる。

転生（？）のだから別の称でもいいのかもしれない。

「ヴォン、だ。何者だ、と言われても反応に困る。」

「？…おかしな平民ね。というかアンタ、？」主人様？の前なんだからフード脱ぎなさいよ。」

「…ああ、悪い。」

そう言えばといい、深く被つていたフードを外す。

フードで隠れていた顔が露見し、周囲から息を飲む音、鼻を鳴らす音が聞こえた。

それにしても目の前の少女、「主人様？」の所を強調してたな…と

「…」

「へ、へえ…以外といい顔立ちしてるじゃない。」

「そいつはどうも…所で説明して欲しいんだが…。」

俺が置かれている状況が知りたくて、質問しようとした。

ある程度は予測が付いているが、俺の予測でしかない。まずは情報収集しかないな。

「いいわよ、特別に」「おい、ゼロのルイズー早くコントラクト・サーヴァントしろよ！…」

「…そーだ、そーだ！平民とキスしちまえー…」「

「う、五月蠅いわねつ！分かつてゐるわよー。」

野次馬共に邪魔されてしまつたが、俺の意識は別の所に移つてしまつていた。

今なんていつた？「キス」だつて？

「冗談じやない、行き成り瑞知らずの少女とキスだなんて、良くない。然し、なんでここで「キス」が出てくるんだ？」

俺が顔を引き攣らせながらそんな事を考えていると、先程の中年の男が話しかけてきた。

「失礼、お名前を伺つてもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。…ヴェンと言います。貴方は？」

見事に禿げ上がった頭がいささか寂しい中年の男の人は、以外と親切な言葉使いだった。

洋服が、何処かの「魔法使い」が着るようなローブに、なにやら長い杖を持っている。

「私はトリステイン魔法学院で教師を務めます、ジャン・コルベールと申します。

…ミスター・ジョン、失礼ですが何処の出身でしょうか？」

「自分は…いえ、分かりません。……記憶喪失、みたいなんです。」

俺は咄嗟に嘘をでつち上げた。

別に、日本出身です、とでも大真面目に答えて良かつたのだが、これなら

後から思い出した事にすれば、いくらでも変えられるからな。

「そ、そりですか…それはまた大変ですね…。」

「失礼、変な事を聞くよつですが、此処はビリジョウが…」

まずは、此処が何処なのか。

恐らく日本ではない、といふか確実に、だ。

周りの少年少女を見渡したが、黒髪が一人も居ないと、殆どが金髪だったり、とカラフルなのだ。

「アンタ、そんな事も知らないのね。…ここはトリステイン王国よ。

」

「うん?…やっぱり記憶喪失みたいです…。」

そんな国、一度も聞いた事が無い。

別に世界地図を記憶している訳じゃないから、確証があるとは言え

ないが。

コルベール先生は困ったように何かを考えている。
目の前の少女は呆れたような目で「これが私の使い魔…」、とつぶ
やいている。

そういえば。

「君の名前を聞いてなかつたな。」

「馴れ馴れしく？君？なんて呼ばないでよ。？」主人様？よし、し、
ゅ、じ、ん、さ、ま。…特別に教えて上げるわ。心にして聞きなさ
い。」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
それがアンタのご主人様の名前よ。」

どうやら俺はこの人に仕える事になつたらしい。…不安だ。

N.O.O - 「もう一つの始まり方」（後書き）

妙にルイズが親切のような気がした（苦笑）

んー：本編が書きづらいのは設定が安定してないからかもな…。
近々本気で固定させないと…。

誤字、脱字、認識の間違いがあればご指摘ください。

N.O.・3-「鍛錬な一日」（前書き）

話が余りすすまねえ！

今の所、ゼロ魔らしい要素も圧倒的に少ないしな！

…それにしても相変わらず能力使用技術に進展が見られない。

このままではノーバティに頼りっぱなしの駄目な奴になってしまい
や。

ガンダールヴなら武器もちゃんと使い方はある程度わかるんだけどなあ
(^_^)…。

20・31「鍛錬な一日」

「ハアアツ！」

俺は振りかぶる。目の前で楽しげに微笑んでいる敵（父）の余裕を、少しでも無くしてやる、とばかりに。

「うん、まだまだ甘いね。」

然し、この男、実に余裕である。

…予め20・2「ジグバール」の能力でも使つとけば…。

俺は自分の腕だけが木刀を持つて父を襲つているシーンを想像してやめた。シユール過ぎる（笑）

だいたいそんな事したら、明らかに異常な物を見るような目で見られるに決まっている。

今は基礎を上げなければ成らないのだ。能力の技術は…サムライやノーバーティー達と戦つて上げるしかない。

いや、それにしても…。

カン！カン！シユツ！

当たらぬさ過ぎる。

…最初は「父さん…戦えるの…？」と心配ばかりなのだったのだが。

「ほひ、もう疲れたのか？だらしないなあ、ヴェン。」

『なんだよ、そっちが負けてる癖に！』と言い返したくなるような挑発だ。

息子の挑発する親つてどうなの。

然し、男としてのプライド（笑）を守るため、せめて一発は！

「うおおおおおー！」

俺は勇ましく、父に立ち向かっていった。

おれ、父さんを倒したら、サムライの所へ行くんだ。

死亡フラグ

「いでで…」

結局あの後、俺は一本も…一発も当てられなかつた。身体、プライド共にズタズタだ、ちくしょー。

まあ良く考えてみれば、俺は前世で剣や刀を振るつたこともなければ、木刀も振つたことも、剣道もやつた事もないただの素人なのだが。

然し…素人といえば、原作の主人公も素人だし…口クサスもどちらかといえば最初は素人だったはずだ。

あれ、我流だよな。誰に鍛えて貰つたんだ…？

まあゲームの話なのだから仕方ないか、と適当に結論付ける。

「あら、お疲れ様、ヴェン。父さんは倒せた?」

「無理だった。…なんであんなに強いの?父さん。」

一人黄昏でいると、先程まで刺繡をしていた母が話しかけてきた。
そーなんですよ、たおせねーんですよ。それどころか、掠る事もな
いんですから。

本当にノ。・2の能力使おつかなー、腕だけ木刀やつてみてー
なー。

と不貞腐れていた俺に、母が慰めるように(笑)救済の言葉(?)
を俺に言った。

「お父さん、実は?元?傭兵なのよ。…それもかなりの実力のね。」

えつ

…でしょーねー。

やけに戦闘なれってゆーか、動きが只のおっさんと違ひと憚ったわ。

「因みに無敗だった彼の記録に傷を受けたのは母さんだけだねー」

テヘッヒトイケインクする母さん。

(^ ^) 。

知るか。

「 もおもいつー！」

先ほど**の鬱憤**を晴らすかのように切りかかる俺。
何に切りかかってるか？

キンッ！

「……」

無論、そんな事を出来るのは父さんと…命の恩人だけだ。
サムライ
無言で、受け止める彼（性別不明、というかあんのか？）に心中
で感謝する。

本当に心が無いんだろうか？というほど、人間らしい所がほんのた
まにだが、見かける事がある。

さて、今俺は木刀でサムライに襲い掛かっているわけではない。
いや、襲い掛かっているのは襲い掛かっているのだが、武器が先ほ
どの金属音でもわかるよつに違つ。

実際、俺が木刀で切りかかつても、掠つた…といつよりも空気を切るような。

兎に角、すり抜けるだけで振つても当たらないのだ。
次にサムライに木刀を持たせようとしたが、失敗。
持つことは出来るのに、振ろうとした瞬間に、するつ、とすべるようになってしまったのだ。

ふーむ、「ノーバディ」に生半可な攻撃は通用しない、っていうのはわかつてたが…基準はどうなんだろう。

何が透けて、何が当たるか。

何が持てず、何が持てるか。

やはり謎だらけである。

…で、なんでそんな攻撃の入らないはずのサムライに攻撃が入つて
るのか…と、持つている武器が
サムライに通用するもの…ノーバディに通用するものだからだ。

『クリーパー』

ノーバディの一種である彼らは、体を変形させる事が出来るのが売りの、下級ノーバディである。
人型でないところを見ると「元の人間の心が普通より少し強かつた」というぐらいだろう。

ゲーム内では雑魚キャラでもあったのだが、主人公が強すぎるのだ

から仕方がない。

俺は、この子はやれば出来る子だと思っている。

時に、潰れたスライムのように液体状になつて進み。

時に、翼を生やして空を飛び。

時に、剣となつて突如真上から奇襲してきたり。

…まあ、基本的には数で押す、ノーバディらしくない奴なのだが。

そう。サムライに切りかかった武器、こいつは「クリーパー」なのだ。

『同じノーバディーを通した攻撃ならどうなんだ?』
との、俺の安易な考えの元、実行されたわけである。

「来いッ!クリーパー!」

別にポケンではない。
…じほつ。

さっそく、である。

さて、「ノーバディー界で本来の目的以外で使用された」初めての被害者(サムライは含まない)になるとは露知らず、ソイツはモノクロの茨を潜り抜けてどことなく現れた。

その姿、兎に角平べつたい。

ノーバディ類最小を誇り、小さすぎる腕（多分）に反して、足が体よりも大きい。

ペタ、ペタと歩く姿はキュートに見えそつて見えない。

見た目がシャープだし……、夜は恐らく幽霊に間違えられそうだ

……。

で、「剣に変形してくれ！」といつお願いをして、現在、武器とさせてもらっているのである。

考えた通り、サムライにこの攻撃は通用したのである。

強度も申し分無く、…まあ少し重く感じるのだが、軽すぎても奇襲してもあまりダメージを与えられないか。

然しこの世界での…といつか現実ノーバディは予想以上に強い。

…、単純に原作主人公が強すぎるだけか。

「…………」

その後、しばらくサムライと打ち合っていた俺だが、やはり一発も刀以外に触れず。

一瞬、武術の才能が零なのか、とブルーな気持ちから抜け出せなかつたが、

『違う、一人が強すぎるだけなんだ。』といつ言い訳（割りと本当なのだが）するしかなかつた。

氣を取り直して。

正座をしてなにせりり瞑想のよつな……ただそれにしておるだけであらう
が……事をしているサムライと
剣から戻したクリーパーが虫を丸呑みにするのを横目に……つてちょ
つと見て。

「ノーバディーで食うのか！？」

クリーパーへ向けて叫んだが、首を傾げる（首はない）よつな仕草
をしただけで、またもや虫を探し始めた。
……あれー……そういえば機関って何も食べてなかつたんだろうか？
……だめだ、考えれば考える程想像つかねえ。
まあ、シーソル アイスは食つてたんだけどな……でもまあ、不老な
だけあつて餓死はするんじゃないかな……？

【運命を賭す者】

さて、今回のお題は機関NO.10のルクソードさんの能力。

原作では、曲者ばかりの機関メンバー達の中で一番まともなのではないか？といわれるお方。
短く揃えた髪、蓄えられた鬚など、いかにもギャンブラー好きつて
感じがする紳士である。

というか、事実、生糸のギャンブラーなのだ。彼は。

武器からもそれが見て取れる。

彼の武器は「カード」。：実際これを見て何人かが、「えー、それって弱くね？」と考えただろう。

事実　：彼は戦闘をゲームと考えるタイプらしく…。

あまり、強くない（ぶつちやけた）。

然し、少し不自然な所があるのだ。

本人の属性は「時」。彼の攻撃は、巨大化したカードを持っての連続攻撃、主人公をサイコロにしたり、カードにしたりする。実際、「時」らしい攻撃が一つも無いのだ。

唯一、「時」らしい面が戦闘で出ているのは、戦闘ルール。
彼との戦いは、「時」賭けたバトルなのだ。

（戦闘時には画面上に主人公とルクソードの「時間ゲージ」が格闘ゲームのように表示される。

ゲージはダメージの蓄積や時間の経過により減少し、先にルクソードのゲージをゼロにすれば勝ちとなる。

バトル中は主人公をサイコロやカードに変化させたり、自身がカードに化けるなど、戦闘をゲーム感覚で楽しんでいるのが分かる。）

んで、今回はその隠れた…否、フェアプレー精神で本人が出さなかつたと思いたい、その「時」の技

を解き明かすのだ。

「特に可笑しい所が見えない。ただのカードのようだ。」

い
ず
れ
か。

N.O.・3-「鍛錬な一日」（後書き）

因みに、SJの小説にアンチ要素は無い、と思いますし、それで行きたいです。

殺しどとも出来るだけ避けたいんだけど、戦争や戦闘が多いゼロ魔王の世界です。

：第一話で初っ端オーネが死んでしまつてますけど（苦笑）

まあ、のんびり行こうと思つてます。

No.4!「魔法使い＝メイジ」（前書き）

はい、若干投稿が遅れました。『みんなわい』。

今回はヴォン君のテンションが高いです。

…まあ安定しないのは何時もだと思つてください（苦笑）

今回は魔法について。

20・4!「魔法使い＝メイジ」

魔法。

それはファンタジーにおいて、最も重要な物の一つだ。
自由に空を舞い、火を起こし、水を生み出す…。
魔法を論理的に説明しようと言われば自分には直ぐには思いつきや
うにない。

だから不思議なんだうひばじゅ。

「えくすペくとぱとるなーむー…」ほん、ライア。

「今の何のスペルなの?」

不思議そうに見てくる母。

…説明しないよ。某ポッター君について話ても分からないだらうか
う。

れて、御ふざけばかりで進歩が無いように見えただろ？…はい、まったくそのとおりでござえやす。

杖契約に成功した後、なにやら熱い目頭を押さえながらサムライに報告したのはいい思い出。

クリーパー？あいつはカエルを飲み込んでいたんだったよ。

慣れたよ。それが人間の…俺の売りだからや。

「何遠い田してゐのよ。ほひ、もつ一回。」

「ライライライ…光よ。」

コモンスペル唱えても何もおきねえんだもん。

仕方ないから三回はヤケクソで「まほつ」みたいな唱え方で。

パツ！

「えー…」

「やつたわ！凄いじゃない！こんなに早く取得出来たのってあの『烈風』以来じゃないかしら？」

なにやら俺よりハイテンションな母上。

俺としては、今までの「ライト」と喉を枯らすほど叫んだ努力やら、呆氣無せやりで。

といつが、「光よー」には突つ込まないんかい。

そんな「不思議」な魔法ではあるが、この世界ではなにやら。
俺的考へで分けたら、四種類あるらしい。

一つ目、「コモンスペル」

さつきのライトも「コモンスペル」の一つで、杖先に光を灯す魔法だ。
その他、ドアの開け閉め、ランプを灯したり消したりー、等、生活
向きな物もあれば、

杖に魔法を纏わせて近接武器として扱うスペル等もある。
初級魔法としてメイジは誰もがこれを最初に習つらしー。

二つ目、「系統魔法」

いよいよファンタジー。メイジ達の主力兵器。

「系統」の名の通り、火、水、土、風、という各系統がある。
それぞれ文字通り、火を起こしたり、水を操つたり。

違う系統同士を合わせる事によってさらに強化することもできると
いう優れもの。

三つ目、「失われた系統」

この世界に主人公が居るならなつてそつた系統。ヒロインもありや。神祖ブリミルがそーだつたといわれる、まあ、正式名称は「虚無」の系統だ。

最後に確認されたのが、三桁ぐらい離れた年らしく。…それで「失われた」と言わてるらしい。

一応、第五の系統とも言われる。

四つ目、「先住魔法」

これについては記述が少なかつた。

まあ、それについては、分かつてている事、という記述を見れば容易に想像できたが。

人間には仕えなかつたり、詠唱が要らなかつたり、魔法を反射したり。

兎に角、アンチメイジなのだ。そしてそれを使うのは亜人などしかいない。

：まあ、俺も無詠唱の「まほづ」ならあるけどな。：これも人前で使うのは得策じゃないか。

正直、「まほづ」が使える俺としては便利だなーっていう感じしかないのだが、

折角魔法世界に生まれたんだから、系統魔法ぐらいは扱いたい。

「凍てつく学求 (Chilly Academy)」

所変わりいつもの森。

そろそろ名前でも考えてみようかとは思うが、残念だが俺にネーミングセンスなどありはしない。

さて、後半戦はおなじみ能力タイム。

一つ一つ、碌に開拓もせずに放置するものだから、マスターすべきものが増えすぎだ。

まあ、不老だから時間は生憎とたっぷりある。

N・IV ヴィクセン。

属性氷の機関内初の科学者である。

試す順番は決めていいるわけではなく、その日の考え方で決めてくる。

今回は、「機関内でも魔法による攻撃を主力としたメンバーは?」
という考えに基づいた。

該当メンバーは二人。

Ｚｏ・？、Ｚｏ・？、だ。

今日は？にしたが、？も近々試したいと思つてゐる。

「…んむ、造りは頑丈だけど軽いな。まあ研究者でもあるし非力なものも考えて、だらうな。」

さつきから木に投げつけたり、足で踏みつけているが、掠り傷すら付かない。

サイズも一応それなりに大きいし… そつだ。

「スイツフイイイイイイイ、ああああああああああ！…！？」

【放送事故が発生致しました。しばらくお待ちください。】

山の斜面を草スキー。

爽快に風を切り、勢いも増してきたその時。
：後はもうお分かりであろう。

草場が少ない上に無理してスピードなんてあげるもんだから、コーナリングを見事に突っ切つてしまつたのである。

無茶しやがつて。

幸いだつたのは、「コーナリングで脱落したところがわりと山の下部
だつた事と、
その頑丈なシールドを手放さずにつづいていた事だ。

だが。

無論無事では済まされははずもなく。

「ア...ミツ...エ」

衝撃はすべて自分の下半身へ。

つまりは下品ではあるがケツが痛い。すげー痛い。

「氷よー。」

キンッ！

「うおー固まつた。…ツメテッ！」

さて、しばらく痛さに悶絶していた俺だが、何とか復活。
早速「まほづ」で属性でもある氷のブリザドで凍らせていた。

瞬間冷凍。

まさしくそういう言えるほど、一瞬で丸太が餌食となつた。
触れてみると、コンコン、と硬く、とても冷たい。…一応火力は抑
えたつもりだけど、

FUZZで放つたらドライアイスみたいになるんじゃまいか？

「終われ」

さつ、と能力解除。
おー、まだ氷、残つてるね。

これはこれで便利である。主に食品保存に。

そんな事を考えつつ。

最近は何かと探求する事が多い。

俺の不思議ライフはまだ始まつたばかりだ。

N O . 4 ! 「魔法使い＝メイジ」（後書き）

少々やってしまった感があるN.E。

この後は生活環境について一話。

追加要素話一話。

正直追加要素は決まっているのですが、またキングダムハーツシリーズからになりそう。分からぬ読者にはご免なさい。

正直、今だに主人公が殺しを行つシーンが書けないです。ヘタレ抵抗が抜けきらないですね。がんばりたいです。

原作突入については上記三話が終つた後次話になりそうです。
うーん…早すぎるかな、遅すぎるかな?
展開のもつていきかたが下手糞なのでw

誤字、認識の誤りなどがあればご報告ください。

では、これからもよろしくお願いします。

20・5ー「母なる日本」（漫畫）

今日は一般生活の少し詳しく書いたやつ。
オリジナルのセンチュール家ですが、平民達との仲は割りと良好と
いうところ。
そして今日は……

日常。

それは日々変わらない物で、幸せか不幸であつたとしても同じだ。
幸福なものにとつては天国。
不幸なものにとつては地獄。

それは人によつて違ひ。

だが、果して狭間は…その一つの基準は?

「ふああああ…。」

起床。

平民の朝は早い。…貴族がどうなのかは不明だが。
まあ、なんか怠慢とした感じがするからそんな気がするが。偏見

季節は夏。明け方というのにセミが既に大合唱していた。
俺は寝床であるベットから立ち上がり、部屋を出る。

「お。おはよー、ガーン。」

「あ、ひー、おはよー。」

「おはよー。」

寝起きなのでぼおーっとした頭で両親に朝の挨拶を済ませると、外へ出てまつさきに顔洗いへ向かう。

ぱしゃっ

「つめてー。」

家の外にある井戸で顔を洗う。

水をくみ上げるのも意外と力が要る。これやつてるだけでも力付くな。

バサツバサツ。

ア”ツー

「……。」

突然の羽ばたきの音と悲鳴を聞いて嬉しくないことに俺の意識は覚醒。

俺は無言で立ち去る。

クリーパーが鳥を食べてたなんて言つてもだれもわかりはしないだろう。

最近アイツ、とことんギャグになつてきているな、と思ひ反面、生態系とか大丈夫か？見つかったりどーすんだ？とかいう危機感が募っていた。

…後で無闇に生態系壊さないよつに命令しないとな…。

羽ばたいてゆつくり森へと戻つていくクリーパー見送つた後、家に戻つて朝食。

食材は主に収穫した野菜を煮込んだ物等、この世界では以外と贅沢なのかもしれない。

残念ながらお米がないのだが。

母に聞いても父に聞いても、「お米? なにそれおいしいの?」的な返事しか。

主食お米な俺にとつては辛い事。

農業の知識と経験があれば、是非とも農作したいものだが、生憎と稻刈りの経験しかない。

まあつまり…

「お米諦めろよ（ ^ ^ ）」「こうい」とだらう。

…今更遅いので置いといて。死刑宣告（大げさである）にも等しいからショックだけども。

とはいっても、母の手料理は美味しいので余り困つてなかつたりする。

「偉大なる始祖ブリミルよ…」

この変な御祈りさえなければ言つことは後はないのだが、この世界の神話はどうなつてゐるのだろう。ブリミルといつ奴は前世で言つ、キリストなのだろうか。

調べてみる価値はありそうだ。

「はつ！」

カン、と木刀と木刀がぶつかる音が整備されていない農道響いている。
否、整備されてるんだけども、科学が全くといって発達していない
この時代、大分荒れています。

朝食を食べ終えると、父と鍛錬。

此處は以外と邪魔になりそうではあるが、以外と苦情は来ない。
それどころか、「見物させてもらつてるよ」などという声が。

「ヴェンのお兄ちゃんがんばれー！」

「坊主、あぶねえ！」

「動きが良くなってきたな、兄ちゃん。流石レイグの旦那の息子だ！」

な、わけで、周りにはいつの間にか人だかりが出来ているわけである。

俺がぼこぼこにされるところがどう白熱するのか分からぬが、近所のおっちゃん共はなにやら興奮気味である。

から竹割りで切りかかってみるも、真面目な動きでは当たるわけもない。

「まつたつてやあつ！」

薙ぎ払い返し、突き。

某縁勇者の剣技の真似である。

スツ、スツ、コンー

「なん……だと」

「スピードはいいね。でもまだ真直ぐすぎるかなつ！」

相変わらず余裕の表情。

アンタ何者だよ……畠仕事した後なのにそれとかねーわ！

カンカカンカン。

「ふつほついえ！」

「ほーれほれほれ！」

俺だつて伊達に鍛錬を続けているわけでもない。
父さん、サムライに鍛え続けられれば……！

容赦ない突きを繰り返す父の攻撃をサイドステップで避け、
振り抜きで腕を狙つたのだが。

ひょいつ、すかつ

「え」

「貰つた！」

カンツ！

「いでつー。」

見事に空を切り、逆に木刀を叩き落とされてしまった。

結局その後は父がモンスター討伐に出かけるまで続けられた。
…相変わらず一勝も出来なかつたが。

化け息子に勝る化け親父。…こりや早く追い抜きたいな。

父の仕事は傭兵兼農夫である。

といつても、主にモンスターを討伐して安全を守る、といつ事をしているのだが。

途中で胡散臭い武勇伝であつたが、父の最盛期時代の話を聞かせてもらひつた。

暴れ狂つた火竜を討伐したことがある、とかきかされても、ねえ。

(笑)

まあ実力も、最盛期じゃないにしろ相当あるといつことは分かつて
いるので、

なんとなく信じられない事も無い氣はするが。

「あ、ヴェンにーちゃん!」

「お、ハティか。なにしてたんだ？」

田の前でペコリとお辞儀する藍色ショートヘアの子。
名はセンチュエル・リール・ハティ。

そう、この子はこの地を収める貴族様の3人娘の一一番上。
性格は男勝りの元氣者で、貴族らしい気品の無い、だけどもやさしい子だ。

よくお忍びといふか、勝手に館を飛び出しては、平民の子供と混ざって遊んでいて、

分け隔て無く接してくれる為、周りの平民からも気に入られている。
今でも他の子どもと遊んでいたらしく、一へへ、と笑うと子供たちの輪へ戻つていった。
年齢は俺と一歳差。顔立ちも将来は美人となるであろう綺麗な顔立ちをしている。

あ、リアル執事に連行されてる。

少年少女も必死に助けてる。疲れてるなあ。

因みに、連行しようとしているのはセンチュエル家に使っているヒルドさん。

逃げ出す彼女を見つければ、勉強をしないハティを連行しているのだ。

それは彼女が輪に混ざつて遊んでいる最中でもかまわず連行するもんなので、少年少女たちには余り好かれていない。

「彼は苦労人だからなあ。ま、ハティのことを一番田に大切に思つてるのは彼だろうしな。」

村人は苦笑しながらそれを見ている。

無論一番田は親である。それも親馬鹿なのだとたで、娘達に向ける愛は人一倍強いらしい。

まあ、まだ若い（24）のに白髪が混じるのが地味に早いのは、確かに彼は苦労人なのだろう。

「お前なにしてんだよ」

いつものセンチュエル森：名前が安価なのは気にしないでくれ。

それよりも、クリーパーに命令をしなければ、と思いつつ入った俺は。

鍛錬で切り開かれた広場の中央丸太でポーズを決めているサムライ。

…こいつをどう思つ？

何処かで悪い物でも食つたのか、と一瞬思つたが、あ、口ねえわ
と結論に至る。

今世紀最大の謎だ。

「 いじめる。」

「 え」

なにやら変な単語が聞こえた。

「（やべえ、俺疲れてんのか！？いくらなんでも元の世界が…日本
が恋しいからって流石にこれはないぞ！？それともお米なのか！？
お米を食べたいが故の錯乱なのか！？意味わからねえ、どりあいす
……）」

「喋った！サムライが喋った！」

某ハイジのよつて叫んでおいた。

N.O.・5! 「平民なる口魔」（後書き）

ところが「うわでなんともまあ、サムライ君が喋りました。

なんだかボケが欲しかったのと、後半戦が寂しかったので勢いあまつて

にしても、原作はアニメしか見てないので、ゼロ魔の設定とかわからんのよ。

宜しければ、今後ともお願ひします。

誤字、認識の間違えなどがあれば、J報告をお願いします。

20・6!「覚悟」(前書き)

今回は下手糞なシリーズ。

実際考えている事としている事が矛盾した所が多く出てきたりでね
あります。

次回で平民少年編は終わりに…なるかなあ。

「ヒロヒー。」

「うやら幻影でも、疲れていたために聞いた幻聴でもないらしい。正義のヒーローばりにかつて良くて漠転ばくてんを決めたサムライ。

いや、俺の中のサムライのイメージが…。

「いや～、願つてみるものでござるなー。ヴェン殿。拙者のような一ぱいでいでも願いといふものは聞き遂げられるものとはー。拙者、感動したでござるー。」

「…えつと。どちら様？」

「のおおおつーー？」

意氣揚々と話しかけてきたサムライ（？）に現実を認めたくない俺は思わずそう聞いてしまった。・・・にしても盛大なズッコケだな。リアクションに俺が感心していると、サムライは立ち上がり、ぱっぱっ、と土を払い。

「拙者は、サムライの中でも最き時主人（ヴェン殿）をお守りした

「

「 薦すすと申しあげる…」

「いつやうひるのサムライ、名前まで持っていたようである。一瞬某量産型の名前を言いつて冷や冷やしていたが。

にしてもだ。

「なんで急に喋れるよつになつたんだよー!？」

残念ながら、俺は謎を自分でゆっくり解こうとしたタイプではない。早急に今世紀最大の謎の答案を求める」とこする。

すると奴は田(?)を光らせ。

「よくぞ聞いてくれたで!」さるーそれは昨日、ウーン殿が能力の実験とやらを終えて、別れた後で!」さつた!」

「で、結論だけ聞こうか?」

「手厳しッ…回想ぐらこっこで!」さるー!」

(サムライ視点)

~~~~~

「はあ……今日も対して調べられなかつたなー。んじゃな、サムライ

「……」

手をヒラヒラさせて言ひ主人を無言で見送るサムライ。

隣でまだなにやら咀嚼する音が聞こえていたが、特に皿に留めるこ  
ともなく、鍛錬を行なつて居る……

一匹はその広場へ足を進める。

パリッパリッ。

少々五月蠅いでござるよ。

そう一一番田に主人に仕える事なつた部下クリーパーに注意しよつとしたが、

「……。」

出るのは沈黙だけである。

…もどかしい。然し、今に始まつたことでもない。

過去にも、主人に言葉にして注意を促したかつたあの時も。

刀でしか語る事ができないサムライには…辛い事であつた。

心を少しとも手に入れる事ができたあの日からだ。

この気持ちに苛まれたのは…打ち上げる事のできない心の叫びば  
かりに悩まされるようになつたのは。

「……。」

何か声が聞こえた気がして、桜花は周りを見回したが、姿は部下意外にも居ない。

部下はしゃべる事が出来ないし、一体。

『ああ……これは念話です。あなたの意識に直接話しかけてるんです  
よ。』

「……。」

驚いた。

『良かつた、成功してたみたいですね。あらか…これじゃ念話に困  
るなあ…んじや、えいっと。』

「…や、」

『?』

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…。」

感動だと、一瞬彼(?)の涙(?)から滝のような涙が出てこる  
幻影が見えるほど。。。  
猛烈に叫んでくる。

積年の願いが適つた。

…少々呆気ない理由ではあるが。

~~~~~

「えつと、ひょっとしてだが、その女の声の人って…。」

「主に『貴方を転生させた神様』って言えば解ると申されていてが…なるほど神様だったの『ジギルナ』。」

なんともまあ。

なにやら鶯に続きを促してみれば、第三の願いがカウンントされなかつたようだ。

うん、そーいえばノーバティって不老なんだよな。
んで変わりに送られた物といえば…。

何か見たことのある肩当。

「はい…?」

「へ・ビ・う・じ・た・の・で・』『ざ・る・か・?』

肩当…何か重要な事が思い出せそうだけじも…
まあ、良いか。

神様の事だから何時が必要になるんだろ？。

とまあ……。

「む、主人、」

「……ああ、わかつてゐる……。」

エンカウント。

どうやら一人で騒いでいたせいで、敵さんと思われる者達を弓を寄せてしまったようだ。

周囲でガサガサと音が聞こえる。

……数的には6匹。それに音がそれなりに大きい。

(「の足音は……又もやあの？おーく？なるものでいざるか？・

ヒソヒソと俺に訪ねてくる鳶。

……いや、知らねえよ。俺だつて聞きたいよ。

(「やうなると厄介だな……囮まれてゐようだし……逃げるのは難しいな。

)

切迫した殺氣が立ち込める……冷や汗と共に未だに音を立てる周りの草むらを横目に、

この展開をどう切り抜けるか、という方法を詮索していた。

「（畜生……単純に切り抜けるだけなら増援を創ればいいんだけどな
……。）」

同じく警戒しながら、何か思案している様子の鳶を横田に。

「（マイシ（鳶）ひばかりに頼る訳にやいかんしな……。）

それに、増えれば隠すのも辛くなる。できれば危険は避けたい。

肩当は戦闘フラグだつたか。

オークみたいな馬鹿力と接近戦は懸命ではない。ならば。

【凍てつて学研究】

凍らせて一気に蹴りを付けるしかないのだろ？。

ヴェンがシールドを構え、鳶が抜刀した。

「ブギィイッ！」

それを開始とするかのように、一匹のオークが襲いかかる。

…ヴェンの予測は間違つて居なかつたようだ。

「…せいつ！」

瞬間、鳶の流れるような動きで懷に潜り込み、刀で貫いた。急所を狙つての攻撃のようで…恐らく心臓かもしれない、オークは痙攣した後、あつさり絶命した。

それを見て、やはりヴェンが口元を抑えて、顔を青くした。

「むぐ…」「アギッ！」「あつ！」

「主人、危ないッ！」

一匹目がいつの間にか背後から混棒を降り下ろそうとしていた。慌てて前に飛び込み前転で回避。慌てて行なつたから腰を打つた。痛い。

「氷よ！」
ブリザド

「フギツ！？」

突然現れた冷氣…そして、氷。

力加減が分からぬ。凍りついたのはオークの左足。

否…力加減が分からぬんぢやない。「殺す」事に躊躇しているんだ。

「（ち、畜生！殺らなきや）うちが殺られるつてのに…）こ、氷よ

「！」

「グイヒーッ！」

悪態を付いてもう一度冷氣を放つ。

……だが、やはり力が制限され、右足を凍りつかせるだけだった。しかし、これで一応動きをある程度封じる事はできた。武器を振り落としている。

「四刀流……霧雨ツ！」
キリサメ

鳶といえば、鞘をも用いた四刀で霧のよつよつと体目のオークを切り刻んでいる。

「（あれが……、さつきまで陽気に話してた奴……なのかな……。）」

これが……戦い。

そして、更にオークの悲鳴が重なったかと思えば、戦闘していたのは、あの、クリーパーだった。

「ブギヤアアアアアー！」

ベチヨ。

水を叩きつけたような音がして、降りおろされた棍棒がクリーパーを押しつぶした。

…と思つたその時。

水銀のような光を反射した液体は、みるみる内に体を変形させ。

「ブギ」

槍となつて、オークに突き刺さつた。

左胸に刺さつてゐるようで、悶えるオーク。

銀色の槍はまた変形を初め、先端の部分が長い鍔。そして。再びオークの体を貫いた。

あつという間に三匹のオークを絶命させた鳶とクリーパー。あれだけ至近距離で確實に血が多く流れるような殺し方をしたといふのに…。

全く血がついていない。

否、表面に赤い部分があるのだが、その血は、まるで防水加工された布…傘にかかる水のように

地面へ滑り落ちていく。

これが…殺戮…否、戦闘。

初めてこの世界でオークが死ぬ所を見たと云つのに、トラックに轢かれた時だつて見たのに。

血、死、死体を見ると、膝が震える。
すぐに逃げ出してしまいたい。

目を閉じて、現実逃避したい。気絶したい。

でも、死にたくない。

そう、生き残る事に決心した俺は。

両足を氷漬けにされながらも、また武器を拾い上げ、構えるオーク
に対して。

「『めん

「氷よー。」

止めを、刺した。

この世界は前世のように平和に暮らせる世界じゃない。
平和ボケしたまま、生涯を終えられるような所じゃない。

俺は初めて殺した　田の前の完全に冷凍されたオークを田の前に、

ただ、静かに涙を流していた。

N.O.・6! 「覺悟」（後書き）

ノーバディー達は無双。

正直主人公戦わなくて良いんじゃないのかつてぐりこで、ござる。

まあ、ただ部下に任せっきりの上司ヴァンにはならなことよつにしますけどー。

先頭描写難しい。

誤字、認識の誤りがあれば、報告してくださいませ。

迷走。
そして量は薄め。

あの後、眩暈がするやう、吐き気が来るやうで、両親を心配せてしまつた。

俺が止めを刺したのは、一匹。

残りの5匹は、鳶とクリーパーが仕留めた。
はたから見れば、たつた一匹である。自分からすれば一匹でも…
だけども。

遺体は全て土に埋めた。…体の大きさが大きいだけに大変だったの
だが…。

「……。」

一つの月に照らされる部屋の中、俺はベットで寝転んでいた。
眠れない。まだ、全身が痛い。

俺も何時かはあの事（殺し）にも慣れてしまうのだろ？

そんな考えが脳裏をよぎり、「そんな訳がない」と頭を振つて否定する。
人は良くも悪くも、「慣れて」しまいやすい。

もしそうなつたりしたら、と思つだけで背筋が冷やります。

繰り返される自負の念に疲れ、俺が寝ついたのは、長らく時間がたつたあとだった。

「あ……れ……？」

俺が目を覚ましたのは、ベットの上ではなく、乾いた砂の上だった。周りは暗く、余り見通しが良くない。

ザザアア、ザアアア。

不意に波の音が聞こえたので、そむきて田に向ける。

元の世界と同じようにな、一つの田と海。
照らし出された暗闇の世界だった。

ふと、田を凝らしてみると、誰かが岩の上に座つているやうだった。一瞬、俺は元の世界の夢でも見ているのかと思ったが、生憎とこんな光景は見たことない。

それに。

田の前の？黒いフードの男？で、何処が分かつたところだった。

「…！」んな所に客とは珍しい。」

見たことがある。

俺が前世で死んだ時も、今世の今でも正体が解らない、あの人物が居た。

「貴方は…？」

「ふむ。君は正式な客では無いようだな…。不思議な事もあるものだ。」

「客？」

一人何かを分かつたかのように言つ彼。正式な客というのはなんなのだろう。といふかスルーかいな。

「おお、失礼。何、気にしないでくれ。君はとても似てゐるな……今では名前を忘れてしまったが…。彼に似てゐる。」

「ふむ、君に解るように説明しよう。…君は夢を見ている。」

夢？

…痛くない。頬を抓つてもなにも感じない。うん、そうなのか。

まあ、何となくふわつふわつとした現実味の無い感じがしてゐからな

「君が此処に来れた理由は私には解らないが…」

彼は若干申し訳なさそうに呟つぶ

「求めてこむ事なら解る……君は答えを求めてこむもつだな

ずばり、俺の欲しかつた事を言つておいた。

…夢だから、とこつ事にしておいつ。

「貴方はどう思つます?」

「…どうだらうな。答えは私は答へられないかもしけない。」

… そつなかあ。

まあ確かに、急に「殺しについて貴方はどう思ひ?」なんて答えを
求められてもな。

ところが、「死」つてこつ概念が無い所で生きてるからね…。

「只、殺しこつ行為に正邪や正義はない」とこつことだな。」

…?

「殺しが全て罪とこつのは…無論例外もある。」

例外？

「肉だ。人は肉を食べる為に生き物を殺すだろう。弱肉強食、だ。

それに、君は一度も蟻を踏み潰した事は無い、と言えるか？」

それは、言えない。

「逃げるようではあるが…、自己満足や無意味な殺しを避けねば良いのではないか？」

時には守る為に奪わなければ成らない事もあるからな。

…その能力をどう使う？」

この能力を…？

「以外と答えは簡単な物だ。

まあ、力が無い物にすれば、？成し遂げる？事は実に難しい事ではある。

全てを温和に終わらせる事が出来ない事のほうが多い。それは力があつても同じかもしけんが。

だが、お前には力のある者だ。」

「… そうなのか。

命を奪わないで済む方法… 否、命を奪つ必要性を発生させないよう
にする為に。

「 答えは見つかったかね? … くれぐれも間違つた選択をしないよう
にな。

それと… それは元は私の能力だ。 有効に使つてくれたまえ」

ああ、有難う。

探してみるよ。

最後に波の流れる音が聞こえ、俺の意識は薄れていった。

No.6.5-「夢」(後書き)

頭の中が混乱中。

?彼?が誰なのか…、
どうして夢で彼を出そうと思ったのか、作者でも分かりませんw
次回でようやく原作メンバーと出会い。

No.7!「旅立ち」（前書き）

ふえーい、更新が遅れました御免なさい。

今回はついに、原作メンバーと出合つ…瞬間手前までビリヤ。

「旅立」

とある日の朝。

待つてましたとばかりに手を振り上げ。

「キィイイイイイイイイイイイイイイイイウウウウウウ

サツ

「クイイイイイイムウウウ…

サツ

「ゾおお「せらせらーよー!」手厳しちー?..?

アホ
鳶の頭を殴つて止めさせた。

ごほん…行き成り冒頭で悪いな。

10年間ですっかり背も伸び色々変わってしまった俺だ。ヴェンだ。鳶が冒頭で叫んでいた（未遂に終わつたが）通り、キング・クリムゾンだが許してくれ。

… IJの10年間。長かった。

否、実際終えてみると、案外早かつたなーって感じではあるのだが、修業中は大変だった。

まあ、結局、村に任された仕事をこなしたり、使う余地があるかどうか怪しい系統魔法の訓練をしたり。

どうやら適正は風にあつたようで、それなりに強い突風を起こすことが出来た。

「ランク？ かどうか解らないが、母によると『ライン』程度らしい。

因みに他の魔法については、同じくらい「火」があるぐらいだった。

…どちらも「まほつ」に負けているから、はっきりといつて微妙だけども。

でもまあ、上位になると分身を作り出せるらしい。

単純に分身といえば、できなくもないのだが、俺の分身はダメージを受けると俺も受けた事になる。

しかし、風のスクウェアスペルの分身は… 某忍者漫画の影分身のようなものらしい。

辿り着くには高い壁があるけども。

.....

「ヴェン、それは考えて決めた事なのか？」

「そうよ。そこだけはハッキリとなさい。」

昼の食卓。

飯を食べ終え、俺はある決意を両親に話す事にした。

この世界での成人が今一解らないのだが、俺はもう20なのだ。（

前世合計 38。)

そろそろ見られる物を見たくて旅に出たいと思っていた。

のんびり平和に暮らしたいとは思わない事はないが、
やつぱり異世界なのだ、冒険しなきゃ損だよなあ。

んで、俺が、

「色々知りたい事、やりたいことが在るんだ。だから…旅に出ていいか？」

そんな事を告げると、先程の両親の再問。

俺はゆっくり頷いて、

「ああ。それが俺の願いだから。」

「…………。」

俺が割化し緊張しているが、堂々と言い切つた後、両親は一人とも思案顔になつて唸つていた。

そして痺れを切らしそうになつた時。

「…わかつた。なら、？あれ？を持つていきなさい。」

親父は重々しく頷くと、自室へ歩いていき。

程なくして、大振りの剣を持ってきた。

その剣は一般世間でいう大剣…もしくは両手剣と呼ばれる大きさ。
N.O.・7でいう？クレイモア？より大きめで、片手で振るうのにには
難がある。
ロングソードか。

鞘のカラーは薄い緑で、長年愛用されていたと思われるよつた傷が
あちこちに付いている。

しかし、鎬びが少しもない所を見ると、良く手入れされていなむつだ。

いや、基準はわからないけどね？

「父さんが母さんと結婚する前まで……傭兵時代の時愛用してた剣だ。」

「おお……それは年季が感じられる訳だ。
つて、結婚するまで? したあとは何使ってたんだ? モンスター討伐とか……
まあ、いいか。」

「父さんはもう使う機会が無いかもしないからな……。ああ、後
砥石もだ。手入れはちゃんとするんだぞ?」

「すしり。」

「おお、思つたより少しだが、軽い。」

「あら……その剣を見ると思いだすわねほら、あの時の……」

なにやら昔話を始めた二人。

なんだかんだで、夫婦水入らずの生活でも送りたかったのではない
だろうか。

二人とも見た目にはまだ若いが、年は確實にとつている。

俺はここから死ぬまで姿に変化は無いんだけどな。

ちょっと寂しくなった俺だった。

・・・・・・・・

「ほほおー、主人のお父上の愛剣でござるか……。」

「ああ、傭兵時代から使ってたらしい。」

所変わり森の中。

数の増えた丸太の上に、俺と鳶は座つて会話していた。

此処も変わった物だ。

：少なくとも良い意味では無い。残念ながら。

広場のスペースは何倍かに広がり、地面が抉れている所、隆起している所。

大惨事である。

「それにしても良く見つからなかつたよなあ、ほんと……」

「？」

「いあ、なんでも。」

「ひつじたで」「ざるか？

と言わんばかりにしみじみ修行の日々を思い出す俺に疑問符を浮かべている鳶。

「んで、その剣つて凄いのか？」

「大した業物でござるな。これを作った匠に御会いしたい。主でも解る通り、結構な年季物。

お父上も手入れ怠つていなかつたのでござりやうなあ。」

べた褒め。

といふか薦よ、お前自分の愛刀しか使わんだろう、なんで詳しいんだ？

「拙者とてサムライである前に一人の剣士でござるよー。」

だそうだ。俺にも解る日がくるんだろーか。

…能天氣な癖して割りと博識なんだよな、コイツ。

と、

ペタリペタリ。

独特な足音と共にクリーパーがどこからともなく歩いて来た。

「お、ちゃんと来たな。つて何銜えてんだ？」

クリーパーを掴んで目の前まで持ち上げる。
あからさまに毒毒しい色のキノコを銜えていた。

ああ、これは……。

「…クリーパー、ゾーテングダケ（毒キノコ）をキャプチャーしたみたいだな。」

否、実際この世界はない。ただ、一応毒キノコはある。それも人を致死させる程の奴。

ただ、直感的に言いたくなつだけだ。気にしないでくれ。

まあ、大丈夫だろ?からジタバタし始めたクリーパーを降ろしてやる。

「所で主、何時出発するの?」
「主じやなくて、ウーンって呼んでくれよ……明日の朝。」

「ムシャムシャ」

「明日の朝で?」「誰か?」、拙者達は?アレ?の中で?」「誰か?」

「うんむ。」

説明しよう!

? アレ? とは N.O. · I.O 「ルクソード」 武器であるカードの事である!

自分がカードに入り込んだり、カードに相手を閉じ込めたりとしている所からヒントを得て、「これなにか保管したり保存したい時に役に立つんじゃない?」という考えに至り。

結果、見事に対象を保管させる事に成功した。

一枚につき一つしか物を入れられないのだが、カードの数は無限にある。

出でうと思えばポンポンでるのだ。

ただ、事実物をコンパクトに保管するだけなので某猫型ロボットの四次元ポケットより不便だ。

まあ、その代わりなんと、カードの時を操れるようなので、食材等も保管できる。

因みに中の物を取り出す方法としては、俺が解除するしか無い。

とまあ、これに鳶達をバレずに運ぶ事が出来るわけである。ただ、如何せん中は何もないから暇らしい。俺はまだ入ったことがないからしらんが。

主にそれが鳶の不服らしい。

「拙者が自由に表を歩けるのは何時になるのでござんなのかな。」

「……ん。善処するわ。」

何時かはそんな場所を作りたいとは思つ。前にも言ったであろうが、時間はあるのだ、のんびりでも確實に探せる筈だ。

【運命を賭す者】

称号を唱え、カードを創り出す。
表まつさらなカードが一枚出たのを確認して、

「んじゃ。」

「御意。早く出られる事を期待するでござる。」

パアアツ

光と共に鳶の姿が消え、カードにサムライが描かれる。それを確認すると。

「次はクリーパーっと…」『ら、逃げるな。』

毒キノコを食したクリーパーは再び歩きだし何処かに行こうとしていたので、むんずと両手で捕まえてから、ジタバタするクリーパーを同じようにカードに保管した。

一枚のカードが無事保管されたのを再び確認して、布のバックに入れる。

「……。」

長年お世話になつたセンチュエル森に静かに俺はお辞儀すると、
剣を背負い治してから。

背を向けて村へと戻るべく足を踏み出した。

・・・・・

「明日から旅に出るんだと? そりやあ寂しくなるなあ。」

長い間お世話になつた、大工のラトクさん。

この人には折れた鍬などの修理なのでお世話を掛けた。
鍛錬ギヤラリーの一人で、気前の良い親父だ。

「はい。わんわん、その時だと思いまして

「堅苦しこ話し方は止めよう。ふむ、確かに思えばお前も随分で

かくなつたもんだな。」「

餓鬼の頃なんて、嵐が吹けば吹き飛ぶよつたチビだったのにな、と
懐かしそうに言つラトルクさん。

そつや、二十にもなれば昔のヒロロウとした所も無くなるだらう。

「何時ぐらじに戻つてくれるんだ?」

「せうですね……じゃなくて、そつだなあ、何時になるかはわからな
いな」

見るもの見てからじや遅いかもなあ……。

ラトルクの親父も、元氣とはいえ歳でもある。

もしかすれば、王都か何処かで職に就くかもしれない。……といふか
就くだらう。

「まあ、報告こなして戻つてくるよ。」「

「ああ、忘れるんじゃないぞ。……それじゃあ、俺は仕事がある。」

「わかった。仕事、頑張つて」

言われなくとも、ヒバカリに鼻を鳴らして作業場へと戻つてこくら
トク。

さて次は……。

んー、ハティはいま魔法学院に居るんだっけか。
なら挨拶出来ないな。残念だ。

「えー兄ちやんどうかいつしかつーのー?」

「何時戻つてくるのかしら?」

「へぇー兄ちやんもつこ出すのか。」

村の少年少女。

よく昔話を聞かせて貰つたお婆ちゃん。

先程のラトクの親父の弟子さん。

村人に挨拶を済ませて行く。

途中、子供達と遊んであげたり、家へ招いてもらったり。

そして、日は落ちて、夜。

「答え……見つかるかなあ。」

俺は朝早く村を出る為、早く寝付く事にした。

ぼそりと今回の旅の目的の一つに対する不安を呟いたのだった。

・・・・・

「い」馳走様

朝。

若干息子の旅立ちを祝つてか、豪華な朝食を食べ終えた俺は、自室から、カード等、色々入ったバックと、着替えを肩から掛け、譲り受けた剣を背負い外に出る。

黒いフード付きローブを着込む。以外とお気に入りである。

今日は幸いな事に天氣だ。

旅立ちが雨だとか、正先が悪すぎると。

「荷物は持つた？忘れ物してないかしら？」

「大丈夫だよ母さん。ヴェンだつてもう大人だ。」

「はは…、そうだよ母さん。」

まあ確かに、遠足等とは違うのだ、忘れ物はしたくない。
もう一度荷物を確認してから、

「えいや…行つてきます。」

「「いつでらうしゃい。」「

両親に見送られながら、俺は旅立つた。

そして、運命の歯車は、静かに回つだやうとしている。

・・・・・・・・・・・・・・

ザアアアアアアアアア

「どしゃああー！行き成り大雨かああー！」

それは昼頃を過ぎ、首都トリステニアへと続く道を進んで居た時。

道中にある森を進んでいたひ、行き成り雨が降り出したのだ。

「……いらないな、と内心思いつつ、雨宿りする場所は無いかと、木の下を走りながら探すこと暫く。

「……小屋か。彼処で雨宿りさせて貰うか。」

コンコン

「すいません、誰かいませんか？雨宿りさせて貰いたいのですが……。」

「

反応がない。

人気もしないし、ひょっとしたら留守にしているのかもしれない。

周りを見渡しても、同じような小屋は見えない。

「仕方ない。

「失礼しますよつと……つお、クモの巣貼つてゐる……。」

どうやらここ間人に利用されていないであろう事を示すのみに、埃とクモの巣だらけだつた。

一応、毛布が敷かれた同じく埃を被つたベット、椅子、テーブル等がある。

汚いけど、我僕は言えないし、これでもマシなまうかな、と思いつつ。

「えー…今頃雨止むなよな…もひつ

外を見てみれば、先程の雨は何処へ、また晴れていた。
若干その事に愚痴りつつ、まあ、休憩でもしているか。と思ふ埃と
クモの巣を払つて椅子に座る。
荷物は床に置いて置く。

「ん？」

ふと、埃だらけの光景に見合わないような真新しい箱があった。
箱といつても長方形というか？長いものだ。

近づいて開けてみる。

「えええつーー？」

まさかである。

この世界でけして、科学の発達していなこの世界で見る事になる
とは思わなかつた物をここで見る事になるとは。…それにしても何
故これが？

「ロケット弾だなんて物騒なもんを…。」

筒丈に折りたたまれたそれは、まさしく対戦車用ロケットランチャー
だ。

えーっと…「M72 LAW」？詳しくは知らないけど、たしかM_{メタル}
GSギアソニックで出てきたよな。

然し、誰がこんな物を 。

再び箱にM72を直すと、椅子に座つて思案する。

その時だつた。

ドアが静かに開き……。

「「一、」

今、運命の歯車が、回り始めた。

N.O.・7! 「旅立ち」（後書き）

てなかんじで第七話。

時間を掛けた割には、話が進んでいないといつ事実。

……文才が欲しい。

原作メンバーとの出会いはフーケ編から。

なんか結構無理やり臭いですが（、へ、；）

「破壊の杖」のは合つてますかね？
一応 Wikipedia で調べはしたんですが。

まあ一つて…次回は難しい戦闘描写…。

誤字、認識の間違い等あれば、ご報告くださいませ。

2021年ノート（前書き）

戦闘描写。

といつも、更新が遅くなりました、すいません。

保存するの忘れてデータが一度吹っ飛びました(汗)

今回はノーバディ達は出ません。

「……」「

俺が出会ったのは、団体が熊のような、『前』の良さをもつた人でもなく、威張りくさったような、偉そうな貴族の男でもなく。

青髪の小柄な少女だった。

マントや杖を見る限り貴族だが。

「つ……黒いロープ……」

俺を見た途端警戒して、杖を構える少女。

あちゃー……この子が所有……といつか関係している貴族なのかも……

「わ、悪い。雨が急降ってきた物で……雨宿りしてたんだ。」

「……。」「

俺が慌てて理由を説明するが、未だに表情を変えず、警戒する彼女。何かアクションが貰えないと辛いな……。

「ねえ、何か見つけたの、タバサ… つて黒いローブ…」

「……まつて」

「なにしたのよタバサ。黒いローブの男って正気の男じゃないの！」

「フーケ？俺の名前はフーケじゃない、といつか誰だそれ。」

俺の言葉に、後から入ってきた赤い髪の毛の少女… 恶らく青い髪の毛の子と仲間なのだわ。 も、怪訝そうな顔で俺を見てくる。

「貴方本当にフーケじゃないのかしら… つくならむヒマシな嘘を付きなさいよ。」

「いや、バレたかあ、つてそういうやつで！俺はフーケじゃねっての…、グンヒーっていう名前があんだよ…」

「へえ、んじゅグンヒー。本物のフーケは見たかしら…」

知らない知らない。
と云ふが、

「フーケって誰？」

俺の質問に、彼女達は田を見合せると小さな声で、

「……嘘は言つてないみたい」

「本当に何も知らないのね……」

そこで漸く警戒の色が薄れる一人。

「ん……自己紹介させていただくわね。私の名前はキュルケ……長いからキュルケでいいわ、

なかなかカッコイイ平民さん。」

「……タバサ。」

「あ、ああ。ありがとう。改めて、旅をしてる。ヴェンだ。」

どうやら威張りくさった貴族様……ではないらしい。まあ、それでもまだ見下した感は抜けていなが

まあ仕方ないか。

「んで、答えてくれなかつたらそれで良いんだが……？フーケ？って誰だよ？」

「貴方まだ街に行つてないの？」「ああ。……なら仕方ないわね。」

なんだかんだで教えてくれるらしい。

「フーケってのは、『』最近… といふか暫くだけど貴族の間で噂になつてゐる大泥棒の事よ。」

「大泥棒ね…」

「優秀な土のメイジで、二つ名は？土くれ？…ゴーレムの大きさからして、トライアングル…くらいかしら。」

トライアングルか… といつても実際に見てみなきやどれだけ凄いのかも
想像つかないな…。

「なるほど… で、なんで君たちは俺の事をフーケと？」

「まあ…いろいろあつて私たちもソイツに盗まれてるのよ。それで、私たちは協力してフーケを捕まえる事になつて、」

「うちの仲間の子がなんだけど、フーケが物を盗む際にその姿を目撃してゐるらしいのよ。」

「…それが黒ロープの男」

なるほど…、

「情報では、この小屋を拠点に使つてゐる、つていうのだったけど…

「この様子じゃハズレみたいね。」

偶然、黒コートを着て、この小屋に居た、という事から疑われたわけか……。

なんつーか俺、不幸だな。

「わ、行きましょう、タバサ。ダーリンにも報告しなきや。」

「…（コクリ）」

「さよなら、平民さん。」

「ああ。」

と、一人が出ていこうとした時。

ドア、ドア、ドア、ドア

「なつ、地震…！？」

『あやあああああああ』

「つ、この声はヴァリエール！タバサ！」

「……フーケのゴーレム」

「……が拠点だつてことはアタリみたいだつたわね……、杖をもつて
ない……貴方は違うみたいね。」

二人の後を追い、外に出ると、そこにはそびえ立つ巨大な土のゴー
レムが。

「でけえ……。」

少なくとも、オーク鬼は軽くある。

これが、トライアングルクラスの実力か……と感心。

「……（呪文詠唱の声）」

タバサは既に詠唱を開始、杖を前に出すと、

「トルネード」

ヒュ、ゴオオオ！

竜巻を発生させ、放つ。

強風か、真っ直ぐ、ゴーレムに吸い込まれるように当たる。中々の強風だ、流石に、機関メンバーのほうには負けるが、高いクラスであることは間違いない。

だが。

目立つた傷一つ付いていない様子を見ると、ゴーレム（相手）のほうが強いようだった。

「（風じや分が悪いとは云え…強度は凄いな）」

「私も行くわよ…ファイアボール！」

次はキュルケがスペルを唱え、大きな火の玉を作り出す。こちらも中々大きい。これならダメージが…

メラメラ、と着弾したゴーレムの表面を焼くが、

ブウゥン！

ゴーレムの一払いで鎮火。焦げたぐらいで目立つたダメージにはなっていない。

「ツ…あの、ゴーレム、中々ね…。」

これにキュルケが舌打ちする。

中々所が、大分だと思うんだが。
ゴーレムのすぐ近くにいる、ヴァリエール嬢の姿を見て、

「（俺が動いたほうがいいのか？）」

然し、ノーバディー達と同じで、人前では封印している能力。
…え？このままで（能力未使用）いけつて？
このままでのゴーレムに勝てるほど、化け物にならなければいい
ぞ。うん。

たしかに、血を吐くような訓練はしたが、飽くまで一般人より強い
って程度だ。

そこへ能力使用によるステータスが+される、といふことで。

それに不老なだけであって、消して不死身ではない。
場合によつちや、食中毒で死ぬこともある。

ただまあ…死んだ事ないから解らんけど。

「タバサ、シルフィードを呼んで頂戴！」

「…（「クリ）」

「（黙つて見捨てるほど、俺は落ちぶれちやいないしな…）【静か
なる豪傑】」

今回はN.O.・5「レクセウス」を選択する事に。

実際、まだ他に選択はあつたんじゃないかと思ひだらうが、

まあリスクを少なくするなら、これが良いんじゃないかと。

一回の戦闘で一回までしか能力使用が出来ない、なんて事はないからな。

と、今にもヴァリエール嬢迫る「一レムを止めよう」と歩を進めようとしたその時。

あの科学兵器^{サイエンス・アーマー}と同様、見ることになるとは思わなかつた物を見る。

「ルイズっ！」

黒髪の少年。

そして服装といえば、現代的な物。

背中に鎧びた長剣を腰負つてゐる事を除けば、何処にでもいるような高校生に見える。

「（…でもなんでそんな人物が？）」

……

「（まいいいか。聞いてみりや解る事だし…）」

と、なにやら、揉めている一人。

否、そこ危ないからー。わざと逃げよつよー。

何やら「貴族だから逃げる訳には行かない」等と聞こえたり
乾いた音がしたと思ったら、少年がヴァリエール嬢の頬を平手うち
してたり

「お湯の薬草の匂いがするね。」

「『え?』」

二人に迫るゴーレムの拳。

なんとか間に合う。一人を押しのける。

次の瞬間、ものつそい重量が体に襲いかかる。

「ぐあう……ふんぬううううー。」

一瞬意識が飛びかけたが、
というか飛かけるだけで済んで良かつた。

怪力は怪力といつても、見事にスプラッタになる可能性がある。

まあ、賭けに近い。

「つまらつー。」

掛け声が余裕そう、だって？

ノンノン。むっちゃ辛いです、全身、特に足と腕が悲鳴上げてます。なんとか、ゴーレムとの力の競い合いに勝ち、押し返す事が出来た。

然もよろけてくれている。

真逆、人間に返されるとは思わなかつただろうな。

無論、隙を見逃す気はない。

俺自身もよろけながらだが、アックスソードを召喚して。

「土よー！（クエイク）」

アックスソードで地面を叩き付ける。

クエイクといつのば、地面を隆起させて串刺し、もしくは敵を打ち上げる「まほつ」、「づ」。

発動には地面に向らかの？衝撃？を『える必要がある。

敵を単体で狙つて隆起させる事は勿論、直線上に連續で隆起させるタイプが。

今回は、「ゴーレムの足を隆起させた土で貫き、バランスを崩させるのが目的なので狙い型。

「せやつー…

ガキッ、ズゴォン！

狙い通り、クエイクのまほうは「ゴーレムの片足にヒエト。あの大きい図体ならば、片足だけでは支えられない筈だ。

だが。

それは、ゴーレムが再生しなかつたら、の話だ。

ズズズツ、と折れた片足が猛スピードで隆起した土も呑み込み、元通りに。

「ちくせつー（畜生）フーケのゴーレムは化け物か！」

「ちょっと、貴方…なにものなのよ？す、素手でゴーレムの腕止めたり…」

「質問は後にしてもらえると有難い！あの二人を！」

「え、ええ。貴方は大丈夫なの？倒す手立てはお有りかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。…と言いたいけどな。取り合はず時間は稼ぐ。さあ行つてくれ！」

話している内にも、着々と力が上がっていくのが解る。

上昇の基準が、通常verのかリミットカットverのかは解らないが、…比べようがないからな。

ただ、気力の上がり下がりによつて出来る事も変わるから制御は纖細で他のメンバー同様これも難しい。

キュルケが二人を、特に、「貴族の誇り」がどうとか言つてるヴァリエール嬢を連れて何処かへ行くのを見送つたあと、完全に片足を取り戻したゴーレムへと向かい合つ。

パンパン、と手を払つて。

「てめえは奴らを殺したいだろ？が…悪いがこつから先は一方通行だあ！」

どやあ…

Side キュルケ

「ここまで来れば大丈夫ね…あの平民さん大丈夫かしら…？」

「今すぐにでも引き返すわよ！フーケを捕まえなきゃ……後、あの意味不明な平民の事も調べなきゃ……」

「あつ、ルイズッ！」めんキュルケ、直ぐ彼奴連れ戻していくから！」

またもや懲りずに元の道を引き返していくルイズ。

ダーリンは連れ戻す為に追いかけ……って態々一人をこじまで連れてきた意味ないじゃない！

私はため息を付いて、二人を追いかける。

「ごめんなさいね、平民さん。貴方の努力、無駄になりそうだわ。

Side ガエン

「おおおおおおお！」

雄叫び。

そしてオーラの量は更に増え、暑苦しさすら感じる程に。

まだスーパーイヤ人ほどは出でていなが。

ガゴッ！

先ほどよりも軽くなつたフットワークと、アッシュソードの一閃で腕を叩き切る。

尚も再生を繰り返すゴーレムだったが、段々と遅くなつてきた気がする。

「（つたく…）のままゴーレムを倒せるのは田に見えてるが…。
その後が面倒だな。）」

時間が経つごとに脆くなるゴーレムと、時間が経つごとに強くなる俺。

言わざとも勝敗は決まつたようなものだが。

「（フーケの野郎を取つちめないといけないしな…捕まえられるか心配だ…。）」

「覚悟しなさいつフーケ！」

「つなあー…？」

突如、後ろから物凄い音と共に衝撃を受け、俺が吹き飛ぶ。
まさか、フーケか！？否、でもさつきの声は…

体制を立て直し、目を向けた先には、ヴァリエール嬢の姿が。

「おい、ルイズ！なんであの人に攻撃したんだよ！」

「ち、違うわよ…」ゴーレムを狙おうとしたら、何故かそこが爆発しちゃつて！」

なん…だと…。

今のは爆破ミスだったのか！あぶねえ、まじあぶねえ。
狙いがもしも俺の体内だったら、汚ねえ花火になるところだつたぞ！

おやるべしー爆発少女ヴァリエール！

…って、そんな事考えてる場合じゃなくて。

「やあやつこー！」

迫る拳を切り捨てる。

奥義で葬りさつてもいいが、残念ながら未完成だ。

……あ、そーだ。

「少年！取つてきて欲しい物がある！」

「な、なんだ？！」

「小屋があるだろ？フーケの拠点とか言われてる場所。其処にミサイルランチャーがあるはずだ。」

「なつ、ミサイルランチャー？！」

「ああ、時間は問題なく稼げるが早急に決めたほうがいい。いそいでくれ！長方形の箱にはいつてる！」

「任せろー。」

「ちよちよちよとー。サイトは私の使い魔なのよ、そんな勝手なこと…」

「悪い、嬢ちゃん！これもフーケを捕まえる為だ、分かってくれるな？」

やつぱり知つてたか。現代的な装いと言ひ、やつじやないかと思つた。

小屋へ走り出した少年…もといサイト。ヴァリエール嬢はそれを見て講義の声を上げる。

俺の答えに渋々だが納得してくれたようだ。

「（フーケの搜索を頼もつと思つたが…プライドが高いみたいだな。）

恐らく彼女は俺の指示を受けてくれないだろう。予想ではあるが間違ってる気はない。

再生を終えて、俺を攻撃しても一向にダメージが与えられない事に遅くながら学習したようで、ターゲットをヴァリエール嬢に移したようだ。

ズシンズシン、と土煙を上げて歩き、拳を振りかぶる。

「さやあ！？」

「わせるかー土よ（クエイク）！」

足をクエイクで碎いて、拳をアックスソードを投げて切る。回収しなければ素手だが、時間も時間だ、今なら素手でも互角以上に戦えそうだ。

森のほうへ飛んで行くアックスソードを見ながら、仕方なしど拳を握る。

と、その時、俺のほうにも遂に救世主が。

「持ってきた！一応、俺使えるみたいだから、俺が狙っていいか！？」

「え…？君はソイツ（ミサイルランチャー）使えるのか！？」

「多分、俺のルーンが関係してると思つんだけど…」

いろいろと聞きたい事はあるが。

俺も使ったことは無い。というか前世で持てる訳ないよそんなもん。まあ好都合だ。使える奴が使ったほうがいい。

「わかった！一発お見舞いしてやれ！」

「おうー。」

ルーンの力がどうとか言つたのだが…スムーズに展開を終えた所を見ると問題ないようだ。

にしても、俺たち初対面だよな…？

「へへへー。」

そして、サイトの持つ対戦者用ミサイルランチャーが。

バシュツー！

音を経て射出された。

そして、化学兵器はゴーレムへと着弾し。

ドカアアアアアアアアアアアアン！

上半身を木つ端微塵に粉碎した。

残った部分もボロボロと崩れ落ちていく。

「やつたわ！」

「ああ、フーケのゴーレムを倒した！」

動かなくなつたのを確認して一人が喜びあつている。

俺は能力解除して、ふう…とひとまずの仕事を終えて座り込む。

まだ「フーケの捕獲」という詰めが残っているが…奴は恐らく精神力の消耗のしそぎで、今頃疲れ果てているだろう。

それに、恐らく逃げる体力は残してあるのかもしれない。
相手は土のメイジ。追いつくのは無理かも知れない。

「ちくしょー…くたびれ儲けの骨折り損…一人を守れたから良いとするか」

なんか、どつと疲れが出てきた。

能力使用状態の時は息が乱れる事も無かつたつてーのに。

これも能力の一部なのだろうか、と思案していた所。

「だ、大丈夫ですか！？」

と、その時。

森の中から緑色の髪のメガネを掛けた女性が現れた。

ふむ…？この人も仲間、か？

バサツバサツ。

ふと翔く音と共に、青い竜が現れた。

…うわー、風竜か？これ以上敵は嫌だよ、見方であつてくれー！
と、半派都合のいいことを考えていたが、一応警戒する。

「ダーリン、大丈夫？」

風竜に乗るキルケとタバサの姿が見えて、

「（はあ…、助かった…）」

俺は安堵のため息をついたのだった。

だから警戒出来なかつた。

力チャ

「助かつたわ。」

「ミス…ロングビル？」

「「つー」」

裏切り者…否、フーケが襲つてくるといふ事に。

ミサイルランチャーをこちらへ向けるミス・ロングビルもとい、フーケ。

「ちつ…油断した…アンタがフーケだな?」

彼女はメガネを外すと、

「良くなかったわね。」

て、なわけで第八話です。

実際戦闘と言つても、同じ事繰り返してただけだったんですけどね：

（…。 - 。 - ）：

まあ、そこは苦手なのでご容赦を。

もう一度アニメを見直そつかな…。
それとも原作買つてこようかな…。

後で、「能力レポート」なるものを割り込みで投稿します。
そこに詳細を書いていこうと思つので、良ければ田を通してやって
ください。

それと。

『^{ウェン}村雨は使い魔を召喚すべきか?』

これについて、意見を聞きたいと思います。

実際、ノーバディー居るなら使い魔要らなくね?って感じではあります。

まあ、する」とになつたらなつたで、何を召喚するか決めないと
けないです。

では今日はこの辺で。

誤字、認識の誤りがあれば、ご報告くださいませ。

No.9! 「捕獲成功」（前書き）

進展が無い

短い 遅い

がんばった前回に比べて、異常なほどの低クオリティ。

え、量意外特に、変わらなって？

No.9!「捕獲成功」

何も知らない、といふのはとても怖い事である。

適切な医療方法を知らなければ、下手すりや怪我人の命を奪う事が
あるように。

目の前の女性も フーケもどうやら~知らない者?のようだった。

「 「 「 「 「 ……」 」 」 」

ロケットランチャー
化学兵器をこちらへ向ける、ミス・ロングビル、もとい、フーケ。

そして、それを向けられる俺たち5人。

とても不味い状況だ。

俺だけなら、なんとか能力でもなんでも使えば、逃げ出せるが…。

「（この四人をどう助けるか…？）」

残念ながら、助つ人（鳶、クリーパー）は小屋に放置してしまった。…というか、それは流石に隠しておきたい事なので使うかどうか、といえば使わないのだが。

もし使つなら、最初つから使つとけ。

ただ、そーするとここの事態の解決が難しい。

能力もあるアックスソードを回収するまで使えねえし…、説明するのを忘れたが、

『出した武器を手にした状態でのみ、能力の解除・変更が出来る』

これが分かつてゐる事の一つだ。

キーブレードならば、距離が離れてても戻つてくるんだけどな…。

あれ、詰んでね？

それともあれなのか、某ゾンビゲーのウエーカー（？）みたいに両手で弾を受け止めると？

無理言わんといつください。

タイミングみすれば木つ端微塵つて、試す度胸ないれふ。

…ロケットランチャー？

あ。

「 H A H A H A H A ! ! 」

「 「 「 「 … ? 」 」 」

「恐ひしそうで氣にでも触れたのかい……？」

全員ビッククリ、フーケは引き気味。

「酷いな、俺はそんなリアクション求めちゃいないのに。」

と、兎に角、この気耐えられないでの行動に移す。

能力のせいで、ダッシュの時に地面が盛大に抉れたが、これなら直ぐに取り押さえられそうだ。

「ちつ！アンタも馬鹿だねえ、死にな！」

単に俺の勘違いだつたらどうしよう。

一瞬、そんな不安がおれの脳内を走つたが。

カチッ

……杞憂であったようだ。

「ふんっ……」

「くあつ……畜生……なんでだい……！？」

構えたロケットランチャーを蹴り上げ、そのままバク転して姿勢を戻す。

ふ、カッコつけ乙だな、俺。

ちなみにバク転は鳶直伝のものだつたりする。……初めて喋れるようになつた時確か彼奴してたもんな……。

強引に持つていつたから、腕を痛めたな、罪悪感が微妙に沸くが、しめたぞ。

……あれ、どうやって拘束すりやいいんだ？

とつあいす、両手を背中で組むように抑える。

「ちっ……」

「諦めろん。……誰か縄もつてないか？」

油断は出来ないが……どうやらこれで解決みたいだ。

ガラガラガラ。

所変わり、武器も回収、現在俺は馬車の上である。
座席にはキュルケ、タバサ嬢、逮捕されたフーケ、そして向かいにはサイト君とヴァリエール嬢、が居る。

何故か俺は運転席に。

『……や、俺しか馬車を扱えないらしい。……かく言つ俺も得意ではないのだが。

本来ならば、事件解決、ではござりませうだったのだが。

『待ちなさいよ、アンタも関係者なんだから一緒に来なさい。』

何故か不機嫌顔のヴァリエール嬢の一言で、俺の同行が決まった。
どうやら、街に行くのは後になりそうだ。残念。

まあ……馬車も動かせないのだから仕方ないしな……と思いつつ至る。

「さて……聞かせてもらひわよ、平民さん。」「

「はあ……忘れてくれると有難かったけどな……。んで、お嬢さんは何が聞きたいんだ？」

「うひうひ事情聴取は回避出来ないよつだ。」

「あ、俺も聞きてえ事があるんだ！」

「あら、ならダーリンが先でいいわ。」

「ふむ……サイト君が先か……という事は、多分俺と変わらんな。」

「アンタは……アレ（ミサイルランチャー）の事を明らかに知つてみるみたいだった……合ひてるよな？」

「うんむ、そうだ。知つてるよ。」

「つて事はアンタは……。」

「ちよこまち」

やはり、とこつよつに迫るサイト君。
俺はそれを片手で押し止める。

「ね、ねえ、アンタ達、さつきからなんの事話してたのよ。」

「秘密、だ。…まあ、君たちこそ書は無いから気にしないでくれ。」

それからヴァリエール嬢は一瞬ムスつ、とした顔を作り、「まあいいわ。」

そう言ってフーケへの尋問へ。

「……。」

タバサと言えば、やたらと分厚い本から視線を外さず、無言。

「……。」

フーケのほうも、尋問するヴァリエール嬢を見ながら、こんなガキに詰めじとなんてないよ。とばかりに無言。

「はあ……」

とつあいす、ため息を付いておいた俺だつた。

学園へと戻る道は平和なようだ。

ただ、地面が雨でぬかるんだりしていい、少し尻が痛くなつたが。

「んで、俺からの質問だけじゃも。君はどうした経緯でここへ？」

「そこのピンクブロンド…ルイズに使い魔として無理矢理召喚されたんだよ」

「わ、私だって好き好んでアンタなんて召喚したいと思つてた訳ないわよ！」

「あれ、じゃあ帰れないのか？」

「…俺は諦めない。なあ、アンタ、帰り方とか知つてたりしないか？」

「無様ね…ゲフン、んー、と言つても俺はビリでもドアなんて事は

出来ない。

藁にもすがるような思い（そつ見える）で聞いてくるサイト。
まあ、解らない気もしない。突然、見知らぬ場所へ連れてこられて、
「返せない」なんて言われたら…。

「すまん…俺も解らないんだ…でも、協力しよう…」

「そ、そつなのか……はあ…」

落胆してるな。

魔法の中に、転移魔法なんてものが残念ながらこの世界にはない。
否、もしかしたら、只知られていないだけで探せば見つかるかもな。
…。

さしづめ、テレポート（空間移動）ってな。

「ん？でも、某白黒ジャッジメントみたいなテレポートだった
りどりしそう」。

「（俺の能力の中に無いかな…まあ、関わってるとすれば、確實
に属性・空間だろうな。）」

「んじゃ……次は私から。……さつきの馬鹿力といい……貴方何者?」

「人間（キリ）」

「私の知ってる人間はゴーレムの拳を素手で止めないわよ……。」

「ここに居るじやまいか。」

一応、基本は人間だ。まだ辞めちゃいない。

「……。（疑惑の目）」

「まだ人間辞めたくないだけだよ、言わせんな恥ずかしい」

なんかサイト君が疑惑の目を向けてきたので。

「…なんでフーケはその…？破壊の杖？を盗もうとしたんだ？」

「武器商人相手に売ろうとしたんじゃないの？」

「なるほど…。もう使えないけどな。」

その為に盗んだというのなら、納得出来る。

あれ、というかそれしか田畠らじい田的無くね？

金目的なんだろ？が、

結局そのあとは、フーケへの尋問を放置、俺への質問タイムで占められたのだった。

No.9! 「捕獲成功」（後書き）

雪「酷い出来だ。」

ヴェン「無様ねw」

そして今回も登場しなかったノーバディ。
…何処でどう出そうか…。

20.10.「魔法学院到着」(上)(前書き)

思ひつた分だけ投稿。

前回といい短すぎるよね。

(ア) せっかくいつもぐりごの量に合わせてこただきまし。

N.O.・10! 「魔法学院到着」（上）

「へえ……！」がその魔法学院なのか…。」

ホグワーツ…ではなく、トリステイン魔法学院。

現在、長い尋問の末に、若干気分が悪くなるという症状を起こしながらも、無事に一向は目的地にたどり着けていた。

因みにノーバディー達については完璧に隠し通した（ドヤ
否、聞かれてなかつただけだけだけどね？

「なによアンタ、ここ周辺に暮らす民のくせに知らなかつたの？」

「……そりゃー悪(づ)きやあした…。うちの領主の娘がこの学院に通つてゐみたいでね。」

ヴァリエール嬢…改、ルイズ嬢が失礼な聞き方をしてきたので、
むすっとしながら答えてやつた。…仮にも俺は命の恩人だぞ…まあ
いいけども。

「へえ…そりいえば聞いてないわね。どこの領なの？」

「センチコノル領」

「ああ、あの平民と仲が良いつて聞いて、変わり者の貴族の…」

「そんな貴族も居るんだな…やっぱり悪い人ばかりじゃないのか？」

今度はキュルケ嬢。タバサ嬢とフーケが空気になつてゐるが氣にしない。

「氣にしたら負けだ。何に負けるのかわからんけど。

いや変わり者つて…まあこの世界の貴族から見たらそうだひつが
…。

平民にとつては神様みたいなもんだぞ、多分。

ああ、そうだサイト君……けして多くはないと俺は予想するがな。
どんな世界にも、貴族にもいい奴らっていうのはいるものだ。

「さて、と。付いたわね、うーん。お疲れ様、平民さん。」

「ああ。ほり、立てよフーケさん。」

「つたく…呑氣だねえ…、私はこんなのに捕まつたって言ひつかい…？」

残念だつたな？

人は見た目にも寄らないもんだぜ、と言つたら何故か鼻で笑われた。

ていうか、俺の化け物さをアンタが一番わかつてる氣がするんだが？

フーケがルイズに連行されていく、恐らくこのあとは警察的な所に引き渡されるだろう。

さて、俺もさよなら、だな。

ガシツ

「貴方も来るのよ。」

「…たいですか。」

ドナドナ状態で引きずられるのも嫌なので、仕方なしに付いていく事にした。

「良く戻つたのうーーこやはや…よもや、ミス・ロングビルがフーケ
ヒサのひ…。」

「でも良く戻つてくれました。お手柄ですぞ!」

俺が案内…連行された場所は、中央塔の最上階付近の部屋。
目の前で感慨深げに顎鬚を撫でる老人が恐らく、学院長のオールド・
オッスマン…だっけか。
となりのハゲている中年男性は誰だろつか。…まあ教師と考えるの
が妥当か。

「ふむ…で、そちらの方…」

「ヴェンと申します、センチュール領のほうから旅で。」

「おお、あのセンチュエルからとはの。では、ハティ嬢の事は……？」

「ええ、知つてます」

「そうかそうか、と何故か嬉しそうに言うオスマン老人。
この様子なら、ハティは良くしてもらつているのだろう。…出来れば一目見てみたいが。

彼女はまだ気さくでやつているのだろうか。というか大丈夫だろう。

(下へ続く)

20.10.「魔法学院到着」(上)(後書き)

雪「書こう途中で話の流れ忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

20.11.「就職」(下)(前書き)

今回頑張つました。

…面白いかどうかは、作者からじやわかりませぬが。

雪「今更ながら、原作沿いは途中まで…変わる所は変わります。多く分。」

クリーパー「(パクッ)」

雪「めいばかやめの」

Nº·11-「就職」(下)

「さてさて……、リーナ嬢の息子……で合つとるかの？」

「え? ……母と知り合いで?」

現在、少年少女4人の微笑ましい表彰式を見届け、他の人は出でていき。

俺は田の前の老人と対話していた。

驚いた。どうやら知り合いのようだ。

「ああ、そうじや。一時期、この魔法学院に務めとつての。…ふむ、煙管…煙管は…」

「教師、だつたんですか? (...また新事実か…、両親の過去となるとまだなんかありそうだな。)」

オスマン老人は…いや、敬意を込めて学院長と言つべきか。と、いつても、田の前の老人から威厳らしい威厳は感じ取れない。もつと厳しいの想像してたけどな。

「おお、あつたあつた…」煙管を無事発見する事が出来た老人を見ながら、俺はそう思わずには居られない。

「ふむ、当時は土のトライアングル、スクウェアメイジが少なくての。手を貸して貰つとつたのだ。」

「なるほど…、それで、引き止めたのはこれが理由では無いんでしょ?」

「ほつほつ…そつ急ぎなさんな…そつじやの、一つ、お願ひがあるのじやが…。」

顎鬚を撫でながら、暖かい笑をオスマン学院長は作る。

「君の腕を見込んでのお願いじゃが…警備員として働くかんかの?」

「ハリドまさかのスカウト。

「警備員、ねえ。」

俺はオスマン学院長に、「時間をください」と答えた。
「まつまつ。ゆっくり決めて貰つて構わない。」老人はそう返した。

よく考えてみれば、この学院、警備員らしい警備員が居ない。

学院で生徒意外に居るとすれば、雇われている平民のメイド、そしてコック。
で、無論教師。

鎧を着て、槍を持ったような者は居ない。

「「」んな警備体制で大丈夫か？」

芝生を歩きながら、つい、つぶやいてしまった。

否、事実、本当に大丈夫なのか、と思わずにはいられない。

『な、なんで警備員とかを雇つたりしてないんですか……？』

『ふむ……まあ、わしらもメイジジやからな、一人風のスクウェアもあるし……。

『まあ単純に特に必要とする機会がなかつたんでの。』

『は、はあ。……で、何故今になつて？』

まあある程度は予想が付く。

フーケに入られた事による危機感から、だろつ。

『ミス・ショルプスターの話では、君がフーケを取り押さえたらし

いの?』

『ええ。…でもそれが?』

『配属するにも、只の平民警備員ではメイジに勝てるかどうか怪しいからの。』

『君の父上と同じ、?メイジ殺し?なら、安心できるところ物じや
るひへ』

老人は、そういうと、ワインクをしたのだった。
待て、アンタ、父さんの事も知つてたのか。

「よつこじょうこひつと。…警備員、ね。」

取り合はず、学院内の塔を背こ、芝生に座り込む。
再び、どうするべきか思案をする。

「ここで警備員になる事のメリットは？」

まあ、それは……。

『君一人じゃから大変かもしれんが……ふむ、給料は生活に困らない程度は出そう。衣食住も保証するぞ?』

…目を光らせて放つたオスマン老人の言葉でわかるよ、中々破格の条件なのだ。ここにいれば、取り合はずは困る事はないだろう。

メリットは?

それは、各地を巡れなくなる事。休暇は虚無の日等にとっててくれるらしいのだが、たかが一日で動ける範囲も決まっているような物。

…あれ、俺って旅に出たんだよな?

しかし、旅に出るといつても、路銀等が尽きてしまった時、働き口無い、といつのも避けたい。

「（な、ひ…一回でもそれなりに回れるぐら）の移動手段があれば…？」

移動手段、ね。

この世界には、前にも述べたかもしけないが、科学が全く発達していない。

基本、移動手段は使い魔に乗る、もしくは馬なのだ。

さて、こりになると無論、能力でどうにかするしかないという物。

候補としては、

Ｚ〇・2の空間属性。…恐らく、テレポートでの移動が出来て、楽なはず。

まあ、転移場所を間違えれば、生き埋めといつとんでもない失敗事故が発生する。

出来れば使いたくないな。

まだ他にある。

Ｚ〇・3の風属性。単純に、風の力を操つての飛翔だ。

まあこれでいいのかもしれないな。

スピードを上げればスピードは出るし…。

「（パーティー達に何か役に立つのが居ないかな…）」

ふと、ずしつずしつ、という音が聞こえ、そちらの方へ音を向ける
と…。

「お、確か…タバサ嬢の所の使い魔だったか。」

青い鱗に青い瞳。まさしく、ファンタジーの代表格と言える…

竜。
ドラゴン

俺の考える竜というのは、威風堂々とした、人に懐かない生き物を想像するのだが…。

「あやー

」の生き物（竜）、人懐っこいで、おまけに鳴き声がやたらと可愛い。

…思わず拍子抜けしてしまったのが良い思い出だ。

「なんか…ようか？」

「やあいさやい」

全長6メイルもあるが…どうやらこれでもまだ幼いほうなのだと。成体はどれほどになるのか、想像がつかない。…出来れば会いたくもないのだが。

ソイツはまゆつづりから向かつて歩いて来ると、頭を下げて俺の顔を覗き込んでくる。

「……」

間近で見るとすんじい迫力。

ただ、日は近くで見ると、日の光を反射して綺麗な宝石に見える。

「ん……」

とつあこず撫でておいた。

触り心地？意外と柔らかいでたな。

田を廻つて氣持ち良むひにしてゐる。…「マイツ、可愛いな。

「…お前、主人乗せて飛んでたよな？」

「わゆー。」

俺がそりゃ聞くと、畠は血歎びて鳴く。

「お、お前、言葉、わかるのか？」

「わゆー。」

すげえ。

しばらく撫で、ゆっくりしていたのだが、授業が終了した事を知らせる鐘が鳴ると、何処か満足げに竜は飛び去つていった。

主人（タバサ嬢）のところへいったのだろう。

さて、俺も答えを出しに行くか。

「失礼します。」

「おお、ヴェン君か。入ってくれて構わんよ。」

ノックし、ドアを開けて中に入る。

と、オスマン老人は出ていった時と変わらず、煙管を吸っていた。

仕事しないのか…？

机を見ても、種類らしい物はのっていない。

オスマン老人は体をこちらに向け、

「やつてくれるかの？」

俺はその質問に、

「ええ、お願いします。」

できる限りの笑顔で答えたのだった。

20.11.「就職」(下)(後書き)

主人公、就職。

オスマン先生の口調とか色々気になるでござる。

イルククウかあいいよイルククウ。

実はヒロインはイルククウにしようかと思つてまふ。

鶯「……。」

雪「悪かつた」

20・12・「学院内説教（上）」（福音セ

とつあこす出來た前半をつむ。

今更だけど、ヴォンの姿は一次元的な姿に脳内変換して貰うと
幸いです。

魔法使い。

それは子供のならば、一度は憧れた事はあるだひつ、職業。 簿に乗つて空を自由に舞い、人々に平和を贈る……そんな魔法使いに。

少なくとも、俺もその一人であつたはずだ。

はず、といつのは、無論前世の幼少期思つた事なので、記憶がほとんどないからなのだが。

だが、昔の記憶といつのは案外思い出しやすい。

…まあ、俺だけかもしれないのだが。

「…にしても…。」

現在も、その魔法を田の辺たりにしている訳だが…。

魔法で飛んでいるのは三角のトンガリハットを被つた少女でもなければ、

白黒のいかにも、といつのような少女でも、スーパードレスに変身しちやう魔法少女でも無い。

レピテーション

中年のハゲたおっさんである。（けして口に言える物ではない）

「（）のメイジは簾とか空飛ぶ絨毯とか使わねえよなあ。」

無論、若いメイジのほうが多いだらうが。

魔法使いときたら、『簾に乗って空を飛ぶ』が結構固定されていた身としては、

単身で畠を舞う姿を見ていると、物足りなさが残るのだ。

まあ、おっさんには合わないが。

簾と魔法使いに対する考えは兎も角。

「おお、これですこれ。？始祖が残したマジックアイテム？…やつと見つけた…」

「それで、何を探すんですかい？」

「ええ、そうですぞ、ヴェン君。？破壊の杖？について何か記述があるかどうか…。」

「なるほど。」

名前は基本的には、ヴェン君と呼ばれている。
呼び捨てでも良かつたのだが、そこは妥協してくれなかつたようだ。
俺？俺はコルベール先生と呼んでいる。
年上だからね。

コルベール先生が膨大な本棚の中の本から一冊の厚い本を取り出した。

縁の冊子で、金色の文字で題名が掘られている。

… こんなにミサイルランチャーの項目なんてあるのだろうか。

「すぐにでも探しに掛かりたいが…、？破壊の杖？と云つた前はた
しか学院長が付けたとか…
うつむ…時間が何の道掛かりそつだ」

「探索なら自分でしても良いですよ？」

「いや、君の案内が先だよ。それにここは他にも、立ち入り禁止の
所があるからね」

立ち入り禁止？…それはそれで気になるな。

あれか？秘密の部屋か？三頭犬が守つてたりする？

とこうかこの世界にケルベロスとか居たりするんだろうか。

…と、冗談はこれぐらいにして…。

「立ち入り禁止…？ 例えば？」

「例えば……宝物庫等は許可が学院長の許可が必要だつたりするな

「成程」

宝物庫か… そういうえば、あのミサイルランチャーも宝物庫から持ち出されたみたいじゃないか。

他には何があるんだろうか。…すゞく気になるな。

これ以上、執拗に聞いても、有らぬ疑いを受けそうなので止めておく。

「（然し… 良くもまあ、「コーレムと互角に戦えるような俺を警備員に選んだな…）」

気づけば、俺に宝物庫を狙われるかもしけない、といいうリスクもあつた訳だ。

単純に気楽な老人なのか… それとも狸なのか。少なくともあの老人は只者じゃない事は確かだな。

「（ま、雇われた以上、相応の働きはさせていただくけどな）」

「……しかし……時間が惜しいな……仕方ない、……今から言つ場所は立ち入り禁止です、そこにさえ入らないと約束して頂ければ、自由に見回つてもらつてもかまわない。まずはさつき言ったように宝物庫、……それから……」

結局、研究意欲に負けた（大丈夫か？）コルベール先生に、禁止場所を教わり、別れた。

見かけ通り部屋は多いらしい。

全部覚えられるわきやねええ。

長い廊下、階段を抜け、俺は再び外へ。
さんさんと降り注ぐ日光を肌に、中庭を歩く。

「（うこうう天氣の日は、何処か木製のベンチに座つて、昼寝へと洒落

込みたくなる。

とりあいす、初日である今日は門の当たりを中心で警備すれば良いようなので、父譲りの剣を背に突っ立つてみる。

「……。」

暇だ。

そのせいが、段々と眠くなつてくる。

残念ながら、某中國と呼ばれる門番のように立ちながら寝る技術は俺にはない。

実に、教授願いたいものだ。仕方ないので詮索も兼ねることになった。

トリステイン魔法学院の広さは、例えるなら、東京ドーム、1個半、ぐらいか？

まあ、魔法学院はここしかなこいらしこのど、この広さも納得ではあるが。

なんでも、他の国からの留学生も居るらしい。

とりあいす、門の外に出る。

目の前に広がる光景は、草原と馬車等が通る道があるだけの、寂しい光景。

結構、孤立してゐる場所あるんだな。

やつぱり、警備が気になる俺だった。

「出で」

俺はできるだけの小声で叫んだ。

…こまやつてるのは、カードの中の物を元に戻す作業だ。

PON、と軽く弾むような音をたて、白い影がその場に現れる。

「ただいま参上！援護を求め」

「おこばかやめろ」

「うほほっ！」

決めゼリフも考えていたのかコイツは。

然も大声で叫ぶものだから、少々手荒だが、ヘッドロックして薦の顔を押さえつける。

「いいつ、何処に口があるかわからねえもん。」

「静かにしてくれ……、敵が現れたからお前を呼んだわけじゃないから安心してくれ。」

「むぐつ……」

とりあいす、コクリコクリ、と頷くのを確認して、拘束解除する。俺はため息を付くと、長つたらしい現状説明始める。

「なるほど……此処の警備員こ、でござるか。」

「ああ、でも周囲を見てくれ、コイツ（警備）をどひ思ひへ.

「すゞく……薄い（警備が）です……とこか主人しかいないではござらんかー。」

「ああ、案外大変な仕事を受け持つしまつたらしい……。」

ふむう、と老人が考え込むような仕草で、思案している鳶。鳶達ノーバディーは記憶というものがあるのだろうか。

少なくとも、機関メンバーにあることは確かではあるのだが……。

「なあ、鳶。」

「んむ、なんだいやるか?」

「ノーバディーは…お前だつて、今は心はあるけどよ…心を失った抜け殻…だつたんだよな?」

自分でも今更ではあるが…といつか前にも聞いた事があるんだけどな。

「やうでいじやる。…基本的こは、残るのは俺の身、魂のみ。その残つた身…これは記憶も含まれていいでいじやる。」

「ただ…」

「ただ?」

何か思い出やうとしているように見える鳶。

だが…数秒後には頭を振り…。

「そういつた記憶も、闇に飲まれるその口まで永久に生き続ける内に、忘れてしまつた…。」

「…」

「でも、最近、主人と接する上で思い出した事が“じやつてなあ…ほんの少し、それも僅かな事”じやるが…」

「か、片方は思い出したくないトラウマで“じやる…おばなびばな”。」

「何か、思い出せたのか？…じゃあもう片方…。」

確かに、ノーバディは最終的には奪われた心と同様、闇に溶けてしまうしか無い。

だが、キープレードによって、奪われた心と体を取り戻した時、元の姿に戻る事が出来た筈だ。

生ける屍。

：ノーバディーといつのは、悲しい存在。

鳶にトラウマを残した物とは何だろうか？…わからん。

「誇り高く、だけども他人の為に身を差し出せるような人間であつた、といつ事で“じやる。

拙者は今まで、有意義を持てなかつたあるうなあ、心を手に入れてからといつもの、記憶も無くて素直に喜べなかつたので“じやる。でも、僅かでも思い出した、…」の事だけで満足で“じやる。

志を思い出せたのだから、その志を貫くだけではじめるよ。」

一見、能天氣で何も考えてなさそくな奴だけも…

「そりか…。」

よつほど、人間より、人間らしいじゃねーか。

『う、五月蠅いわよ！この馬鹿犬ッ————』

キュピーン ドゴオオオオオン！

……ひでえタイミング。

「およよ、随分と派手にぶっぱなされたね」

「……ててて、あ、ヴォン。聞いてくれよ、ルイズのやつを……」

なにやら、体の所々が焦げている。

あの爆発を体に受けて良く生きてたな。マジで。轟めつ面で、寮から出てきたサイト君に声を掛けた。

「……アイツが魔法を使えたらここまで苦労しねえのになあ……」

「……待つてくれ。魔法が使えない？」

可笑しいぞ？ 現にあの大爆発が起きてるじゃないか。

確か…あの規模の爆発を起こすには、爆炎のスペルだな。

因みに、爆炎というのは、火と土の合成魔法。火2つと土1つによるトライアングルスペル。

空気中の水蒸気を气体状の油に『鍊金』し、空気と攪拌して点火させる、という物だった筈だ。

まあ、実際は爆発事態で吹き飛ばすのではなく、酸素を奪う、という目的だが。

と、この質問に答えたのは別の声だった。

「ああ、あの娘っ子は魔法が使えねえ。どんなスペルを唱えても、

ドカン、だ。」

「？！（何処から声が？）」

「おう、兄ちゃんこいつだ。坊主が背負つてる剣だよ。」

「お、おお…剣が喋つてる…」

なんと、声の発生源はサイト君の背負つている鍛びた剣からだつた。
？（刀の根元）を力チカチ動かしているではないか。

剣の長さは一五〇センチほど、『テカ』いな。

「お、おう。俺の名前は『ヴォン』。アンタは？」

「俺か？俺つちの名前は『テルフリンガー』だ。よろしくな、兄ちゃん

「それで…、彼女は、ヴァリエール嬢は何のスペルを唱えてもあの爆発が起きるのか？」

「そうだ。詠唱の仕方も杖の振り方も正しいんだがよ、どうも理由がわからねえ。」

ますます、可笑しいな。

実際、俺もメイジなので解る話なのだが、魔法は失敗して爆発する物ではない。

精神力だけ使用し、何も発生しないのだ。

母も確かに、失敗した時はそうなると言つていた。

その事を一人+ひと振りに話すと、

「それじゃあ、ルイズが失敗する理由つてのは失敗とは関係ないのか？」

「娘っ子の魔法が失敗魔法じゃないとすると……あー、思い出せやうで思い出せねえ」

「ああ、そういう事かもな。まあ飽く迄予想の範囲だけど…」

では、一体なんだといつのか。

…駄目だ、お世辞にも頭が良いとは言えない俺の頭じゃ答えは違うにない。

といいつか、あの爆発起こせるなら、下手な魔法より強くないか？

しかも、なんでもない場所から突然、だ。

あの爆発が正確に体の内部に定められたら、と思つただけでぞつとする。

「あ”ー、サイト君、君も中々な苦労人だな…」

「…今思つたんだが、？君？付はよしてくれよ。ガホンのほうが年上だろ？」

「それもそーだな。んじや、遠慮なくサイトと呼ばせてもらひへ。」

適当に会話を終わらせると、サイトが何やら洗濯でもするのか、置を持つて水の流れ出している場所へ歩いていく。

洗濯…、男に自分の下着を平氣で洗わせるとは…もしかして男として見られてないのか…。

否、もしかしたら人間とも見られてないかもしないな、と俺は心の中で合掌した。

願わくば、元同じ世界の住人として、彼に幸せが訪れるように、と。

「…『テルフリンガー』降ろしたほうが作業しやすくないか？」

「ルイズが、『私が買い与えた物なんだから、いつも身に付けてなさいよ』って五月蠅いんだよ」

「…そりゃ。」

20.12.「学院内説索(上)」(後書き)

鳶との会話の辺りが失敗してそうな雰囲気。
まあ簡単に言えば、

「主人との交流で記憶（志）が僅かだけ戻った。それまでは、心があつても志が無い状態だから、素直に喜べなかつた。でも、今は、志がある。昔の自分がそうしていたならば、今も同じようにするよ。」

てな感じです。

因みにトライアマといつのは、…予想が付く方が居るでしょうか。
今は秘密です。w

所で。

「ノーバディーには一般武器は当たらぬ」と今小説の設定では、

とにかく原作でもそうなつてゐんですけど…。

ストラグルバトルの棒は設定通り、当たりませんでした。

（競技の為のおもちゃの武器）

何処にでもあるスケボー（スケートボード）何故かノーバディーに攻撃に入る。

（各所設置してある移動用の物）

これってどういう事でしょうか。

ストラグル棒「なんとこう理不足」

20011・11／21・

警備員となる平民は居るやうです。

今小説では、居ないことに。

ルーセン、警備兵の臣様。

N・13!「魔法学院(下)」(前書き)

下巻だぜ！

ストーリーの進展がないで、じれり。

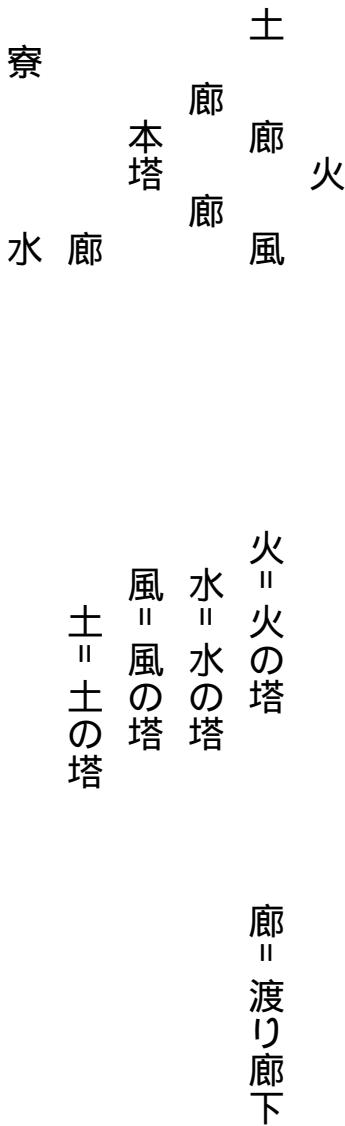
こんなグダグダな小説ですが、これからも応援お願いします。

「 つと…あれが食堂か? 」

サイトと別れた俺は、現在、風の塔と水の塔の間:
アウストリの広場を抜け、本塔に隣接して作られている食堂を目指していた。

本道とは反対の方向には、城壁のそばには、使用人の宿舎・俺が寝る場所がある。

* 簡易学院概要図



食堂正面の扉は、何やら入れない感じがあるので、他に扉が無いか探し回る。

と、大きな煙突がある所、厨房と思われる所へ入る為の扉を見つけた。

コンコン、ヒノックする。

「 あいてまつせ、どうぞお入りくださいせえ 」

中から、中々声がじつこむつさんの声が聞こえた。

此処のコック長だったりするんだろうつか。

平均身長の頭一つ分ぐらいの扉…なのであと少しで頭が付きそうにな扉をくぐり抜ける。

「お邪魔します。…今日から配属となつた者ですが、ijiwa.」

「なんだ、同じ平民の仲間か。ijiwaは厨房だ。俺の名前はマルトー。兄ちゃんは?」

「わーん、と言こます。今回は挨拶周りもかねて、学院内を見て回つてゐるところですよ。」

へえ、そつかい、と陽気に手を差し出してくるマルトーさん。
見た目より陽気そうだ、と思いながら、握手する。

…さつきのサイト君も同様だが、背丈が俺は大分大きいらしく。
とにかくマルトーさんは同じぐらいなんだけども。

強く握つてきたので、俺も対抗として力を入れて握り返す。

「おお、ヒョウ口うとしてる割には力は強いじゃねえか。」

「鍛えていますから。」

苦笑しながら、笑つマルターさんに返す。

「気に入った！飯はここで食つていきな、上手にものを食わせてやるよ。」

「ありがとうございます。」

「なあに、これくらいはいこつてことよー。それと兄ちゃん、堅苦しい話し方は無しだ」

「わかった。じゃあ、自分はこれで、まだ他にも回る所があるので。」

「

おつよー!と返事を背に、厨房を出る。

とっても良い人で安心した。他の使用人の人も接しやすければ助かるけど。

料理は…とても期待できる。なんせ、貴族に対して料理を作つていいのだ、腕は保証されていようつたもの。

そんな事に心を弾ませながら、今度は取り合はず、荷物を置きにへと使用人の宿舎へと向かう。

部屋は一階の一一番奥の部屋。

入ってみると、案外狭くも無く、寝泊りには十分な部屋だ。クローゼットを開け、荷物を入れる。

「うー…後はぶらぶらするか…。」

警備はどうした、と聞かれそうだが、これはオスマン老人が、

『基本的にこの学院の護りはそいらの施設よりも上じや。なんせメイジの教師が多くあるから。なに、フーケのような盗賊がしそつちゅう現れる訳でもないしの。まあ、有事にはしっかり働いてもらひけビの。』

との事なので、大丈夫なのだろう。思つた以上に此処は硬いらしい。どうやら俺たちの心配は杞憂だつたようだ。

実際、俺が必要なのか?まあ有事の際があるが…。

なんとなく腑に落ちないが、それは置いといで。

「そういう今日は、夜に舞踏会やるんだつけか。

…俺が入れる所ではないのは目に見えているけど。」

そんな事を考えつつ、周りを見回す。

先程から気になっていたが、何故か生暖かい…そんな視線を感じる。広場のあちこちに日向ぼっこしている使い魔達を見回すが…違うな。

「（誰かに見られてる…？監視されているのか？）」

「こりや、眞面目にしないとな、と見事に勘違いした俺は、

遠くから未だに視線を向ける、サマランダー（火トカゲ）に気付かなかつた。

「と、でも思つたか？」

伊達に鍛えちゃいない。

俺はどうやってあのトカゲにバレずに接近するか思案する。一応、歩は進めながら。

「（能力の無駄遣いだが…んー。光となつて移動するんじゃ目立つな。NO・13じゃだめだ。）

「いつそ幻でも見せるか？…それが良いか。）」

【影歩む策士】

レキシコンを呼び出し、適時にページを捲る。
ページ事に、相手に見せられる幻術の詠唱、内容などが書かれている。

見つけた。こいつでいいか。

【効果：対象に偽の自分を見せる。本物の姿は見えない】と【効果：五感を騙す】で良い。

「See the mistaken truth.（誤った真実を見よ）」

一つ目の詠唱はこれ。

英語の発音とか、中々難しいのだがある程度グダグダでも大丈夫らしい。

「What is felt is not felt.（感じる物を感じず）」

二つ目。

これで、感覚的もので俺（本物）を捉える事は出来なくなつただろう。

動物的第六感には探知されるかもしれないが、多分、行ける。

幻影である俺は、そのまま広場を進んでいく。

やはり、正体であろうそのトカゲが、器用に脇に生える草むらの草影に隠れながら追う。

「（でけえ…）いつや」いつこうのがダメな人には、絶句な光景だらうな）」

実は俺、自分で思えるぐらい、悪戯好きだ。

特に、冷静で表情を余り変えない人物とかが慌てふためく様子を見るのが、楽しい。

今回は爬虫類だが。

五感は騙しているので、普通に歩いて近づく。多分、今正面を横切つても気づかれない筈だ。

【解説】かいざん

呪文名といい、この解除するための言葉といい、突っ込みどころ満載だが…

「わっ！」

「…………」

OUT。

目をひん剥いて気絶してしまった。

…遣りすぎたか…。

前を歩いてたと思った人物が、いつの間にか後ろに居る。

ひっくり返して腹を触る。…こしょぐりである。

死んだふり…もとい、気絶したふりを見破るべく腹を触るのだが…。反応がない。ただの気絶のようだ。

「持ち主にバレたら面倒だな…取り合はず放置して…と。」

逃げ出す。

貴族に絡まれるのはとことん面倒なのだ。

警備といつても、到底俺一人でカバー出来る範囲等知っている。
ならば、『要請』を呼ぶ必要がある。

「…、ダスクか？…アサシンも悪くはないな。」

情報だけを手つ取り早く俺に流すならば、ダスクが良い。
戦闘能力のほうは、期待できるとも限らぬ無いが…相手がメイジで
無ければ100%勝てるだろ？。

あー、でも、武器事態に魔法を掛けてある物もあるらしいしな…。
ここは専門家…否、本種族の方に聞くしかないな。

「およ、またまた用でいるやるか？」

「ああ、さつきの警備の事だが……援護にノーバディーの力が欲しくてな。」

「ふむ、ならば拙者にその任務、お任せ願えないだろつか?」

「鳶が?でもお前、一寸に気づかれないよつに動くのは、若干無理あるんじゃ?」

実際、俺がダスクを選んだ理由としては、原作通りならば彼らが『変身』出来るだろうからだ。

記憶を失っていた口クサス(No.13)の目を欺く為に、犬に化けたり、FFの登場キャラの…なんだっけ、ビビとかいう奴にも化けていた。

アサシンは地中に潜り込む事が出来る。

・原作では床にめり込んでいるだけだったが、…どうなのだろう。まあ、名前からして隠れるのが得意そだから…とかいう割りかしある、適当な理由だ。

鳶は…サムライは基本的に戦闘のプロフェッショナルだ。隠密とかいうより、堂々をしてそつだが。

「ふつふつふつ。」

「？」

「甘い」で「ざわる。…拙者もノーバティーの一人。ならば…」

突如、言葉が切れると同時に、目の前の鳶が消えた（・・・）。

なん…だと…？まさか、ステルス持ちか！

と、思つたら。

「瞬間移動も出来るで「ざわるー」」

全然違つたで「ざわる。

…よく考えれば、ステルスなんて付けてみる、鳶最強伝説じやまい

か。

いや、までよ、瞬間移動でも大分怖い。

気づいたらザッパリ。ホラー意外の何ものでもねえ。

肝心の戦力としては……申し分無い。

武器の分野は違うが、俺の全ての装備に対して、対等ビコウか優位に立てるような奴だ。

勿論、俺の師匠である。戦い方は基本的に鳶から教わった。

ただ、ノーバディーと人間では感覚的な部分が色々違つて、あまり宛にならない所が多かつたが。

隠密性としては、気配を察知、瞬間移動も出来るのだから余程の事で無い限り、セーフだろう。

「見回り範囲は一人で大丈夫か?」

「問題無いで!」
生憎と拙者は、疲れ知らずの体のもので

まあ、そりゃノーバディーだからな。

「連絡はどう取る? やつぱダスクが居るんじゃないのか?」

「む、そうで!」
わな…。クリーパーを回してくれるのはどうでござるか?」

「… もつきから何度も言つてるが… 大丈夫か…? アイツ、直ぐに生態系を荒しに入るぞ。

「… とか、下手したら生徒の使い魔が食われるかもしけん。危険だ!」

「む、じゃあ連絡用ダスクを配備して頂けると助かるで」ゼル。

変装させて通達させれば良いだろ。」

鳥あたりが懸命か……？ 携帯があれば苦労しないんだが……。

こうして、俺と鳶、一人の共同警備作業が始まるのであった。

舞踏会？

平民である俺が呼ばれる訳なかろーが。

ただ……マルトーさんの飯は美味かつたとだけ伝えておこう。

雪「セコム、しますか?」

「 13巻でござります。」

さつそくの学院内詮索話なのに、話したのはおっさん一人。
ストーリー運び、頑張らないとな……。

相変わらず行き当たりばったりな今作ですが。

「 オリ主人公原作知識がないと、行動しにくい……。」

オリ主が持ってるなら、悲劇がどう起きるか分かっていて、と書き
やすいんですけど。

さあて、どうやって悲劇を回避すべく動かすかな……。

といつも、機関内で治療に応用できる能力なんてありましたつけ?

ケアルガじゃ、病気治せねえよなあ。

なにか、能力を新たに覚醒させるか(おい

20・14-「おな～～じ～～シ～」(前書き)

やつせ、偶に血迷った巻を投稿する軽こ雪です。

わい、相変わらず展開のノロいんですけい、よろ。

No.14 「おな～～～～～～～」

「 」

ブリックだがなんだか知らないが、舞踏会の終わった日から暫く。
相変わらず、暇を持て余す警備の仕事の為、門に背を預けながら鼻
歌を歌う。

とはいっても、早朝なのでそれなりに寒い。
愛用の黒いローブを着籠み、まだ薄暗い所、一人で突っ立っていた。
他の範囲はダスク、鳶に任せている。

ここ最近は至つて平和で、これが学院の日常なのか、と納得してい
た。
まあ、トラブルがない事は云いことだ。平和だね。

ただ。

問題なのは、警備の仕事についての詳細だった。

主に俺は、日没までが担当といつ事になっていたのだが……、

『あれ？ 日没後どうすんだべ？』

残念ながら、警備員は俺しかいない。

警備するといつのなら、実際は日没後のほうが余程重要だと思つた
だが、

『夜は休んで良いぞ。メイジの先生方も見回りしているしの。』

なら良いか、つてんなわけねーだろ。

学院長、最近煙管をふかして座っている所意外見たことねえ。事実、仕事もサボっているのか、書類関係の紙が重なり、結構高くなっていた。

第一印象は優しそうで良い爺さんだな、と思つていただけにこれは残念である。

んで、

『見せてもらおうか、先生方の夜の見回りの現状を！』

案外、他人の目を気にして、眞面目に仕事に取り組んでいると思つたのだが。

結果、期待していた俺が馬鹿だった、という現状である。

この十一日間、眞面目に仕事をしていた教師と言えば、あのコルベール先生しか居なかつたのだ。

その他は警備とも言えない適当にブラブラしているだけの教師、悪い教師は寝ているのか、見回りにすら姿を見せなかつた。

流石に我が目を疑つたね！

おまいらフーケに最近盗まれたばつかだろうが。

なのに警戒レベルが上るとおもいきや、まさかの低下である。あれ、もしかしたら盗まれる前からもこうだったのか？
ひょっとしたら、更に酷かつたかもしれない。

先生、俺、どうしたらいいんでしょうか？

まあ、結局は鳶達に理由を説明し快く承諾してもらつた。

…持つべきは頼りになる部下だな…。

少なくとも人間である俺は、早朝まで寝る事にした。

それから十一日間。

もう色々と慣れてしまった。残念ながら。

?主人、報告致します。?

「おう、どうだつた?」

肩に止まつたハトから報告を受ける。

ダスクの喋り方は一種のテレパシーだ。声も何も聞こえないものの、言つてゐる事は理解できる。

ただ、長文になると受け取りづらくなるが。

因みに、何故ハトかというと。

最初はカツコ良く、鷹が良かつたのだが。

なにやら貴族の風習として、鷹狩りがあるらしい。

という事で、ありふれた、氣にも止められないようなハトになつたわけだ。

?今一時間を含め、現在まで特に異常は見られませんでした?

「了解一。有難う、戻つてくれ。」

？承知しました。？

バサバサと羽ばたき空へ舞い上がつていく。
本塔の影に消えるのを見送つてから、欠伸、そしてまた仕事へ戻つた。

「やけに賑やかになつてきたな……」

門から庭を覗くと、なにやら数人の生徒が自分の使い魔と思われる生物達に話しかけていたり

している。何をしているのだろうと、思いつつ、それを眺める。

見たところ、芸を教えているようだ。

使い魔であろう鳥、（ハルケギニア原産の物か？名前は解らない。）
がエアループを決めていたりと、

動物ショーを見ているようで面白い。

俺も使い魔欲しいなあ……。

まあ、つぽいのなら居るけどな。ノーバディー達みたいな。

どちらかといえば、可愛い生き物が欲しい。

ノーバティー達はシャープなデザインなので、可愛いより寧ろカッコイイだ。

得意な系統によつて召喚される生物は変わるらしいが…其処は余り調べてないし、教えてもらつてないので曖昧だ。…ああ、風竜もいにな…、アイツは可愛かつたし（主に鳴き声と仕草）。

「あら、やつぱりこいつは西だのね、平民さん。」

「おーお早づ。キュルケ嬢。」

「あら、そんな堅い呼び方は止して? キュルケと呼んで頂戴。」

「ん、そうか。んじゃ俺の事だつてゴンと呼んでくれ。…所で、俺に何か用か?」

挨拶を終え、キュルケに聞く。

：田線をずらしちゃダメだ…特に下方向。

仕方無いので、口笛を吹きながら、更に下、地面でも睨んで…とかと思つたら。

「…なあキュルケ。ソイツあ、お前の使い魔か?」

「あら、さうよ。貴方があの時脅かしたサマランダーよ。」

「……」

何となく、キュルケがジト目になつているのを気付く、口笛を吹いて誤魔化す。

そうか…俺が脅かしたのはキュルケのサマランダーだったのか！

目線が痛いでござる。

「…まあ、あれば私に非があつたような物だし、別に氣にしてないわ。」

「…そつか。」

「まさか、サマランダーの視線に気づいて怖がる所か、逆に驚かせに来るなんて、度肝抜かれちゃつたわ」

「H A H A H A。…そういうのが好きな達でね。いやはや、ごめんごめん」

微笑んで頭を搔く。…全く恥ずかしい限りである。

と、何故かキュルケが驚いた顔を。

「どうした？」

「い、いや、貴方つて、笑うとガラッと雰囲気が変わるものね。って

「もうか？…んー、それって悪くなるって事か？なら困るな…」

「いやセハジヤないのよー……んー、なんていうか、お口様が照つたみたいな？」

それっていい事なんだろうか。

取り合はず、悪いことではないらしい。ほっとした。

類を赤く染めている理由が解らないが…、色っぽいな。

心の中でサムズアップした俺だった。

「悪いな、サマランダー…じゃなくて、名前とかあるのか？」

「フレイムっていうの。良い名前でしょ？」

「ああ、それらしい名前だな。…悪いな、この前は。ひょっと脅かすだけだったんだが…。」

「キュルル…」

皿に置いたキュルケに返し、フレイムの頭を撫でる。

…スベスベしてるなー、爬虫類系独特の。

でもまあ、こんな使い魔でも悪くないな。あー、こじても癖になるなコ。」

「ふふ、触り合はが良いんでしょ？毎日手入れしてあげてるも の。」

「ああ、暇があれば暫く撫でていたくなる程だな…。といつか、尻尾危なくないか?」

先程から、目の前を右へ左へとぶらんぶらん動く尻尾。あれだ、ポケ〇ンのヒトカゲの尻尾みたいだ。…あーつまりは火が付いている。

学院の庭は草原、おまけに寮や本道など、中の作りは殆どが木で出来ている。

何か秘密でもあるのか?

「任意で熱を加減出来るのよ。それに燃え移らないわ。」

「へえ…、それは便利だな。」

「それで…用なのだけど、もう話しちゃったわ。」

「そりかあ。所で、質問したいことがあるんだが、聞いていいか?」

「何かしら?」

フレイムを右手で撫でながら、左手の親指を経てて、例の集団を指さす。

まあ、何をしているのかは解るが、何を目的として、が聞きたい。

「貴方…警備兵…よね？」

「ああ、そりだが？」

「ああ、そりだがつて…まあいいわ。貴方は今日、アンリエッタ王女が来るのは知ってるわよね？」

「えつ」

いやそんな事聞いてないぞ。

王女つて…といふかそれが何で集団使い魔調教軍団結成の理由になるんだ？

なんか行事でもあるのだろうか。

「はあ…大丈夫なの？今日は？使い魔評論会？があるのよ。」

「使い魔評論会…？あー…なるほどね。」

王女と評論会。

要するに、使い魔評論会を見に来るのね。そのお姫様が。

アンリエッタ王女と言えば、トリステインの花だとか言われていて、大層綺麗なんだとか。

どの世界でもお姫様つていうのは綺麗なのは。

「んじやあ…キルケも何かすんのか？」

「勿論ー やるからには一 番を田指すわよー！ね、フレーム。」

「 もちろんー。」

「 はは、 そりか。 頑張れよ？」

「 ええ。 ……でも、 タバサには負けたりやつかもしれないわね。」

なんだ、 行成弱氣かよ、 と言いつになつたが。

…ああ、あの風竜が使い魔だつたな…、そりや大変だ…。

全長6メイルで彼処まで綺麗な竜なのだ。 確かに不利だな。

「 と、 ……噂をすれば影… だっけか

「 あら、 タバサ、 貴方も使い魔の訓練かしら？」

「 …（口クリ）」

すたすたと、 ゆっくりこちらへ歩いてくるタバサ嬢の姿を確認して
続いてキルケも気づいて声を掛ける。

そして、 タバサの後ろから四足歩行で風竜が歩いてくる。

「 やつぱりこつ見ても綺麗ね… つー、 私も負けないわ

「なあ、風竜であつてゐる……よな。
お前聞いてもいいか?」

「…シルフィード」

「ああーーー。」

小さく、茲くような声だったのだが、聞き逃しそうになつたが…
シルフィードか。良いセンスだ。

「また会つたな、シルフィード。」

「ああーーー。」

「あはは、もう…ヒショヒショじゃねーか…」

声を掛け、頭を撫でてやる。

すると、ベロリ、と顔をその手に舌で舐められた。
い、犬なんかとレベルがちげえ…。

暫く、このやり取りが続いた。

キュルケが惚けて、タバサ嬢が先程のキュルケのように驚いていた
が…

そんなに、笑顔が良いのだらつか?

でもまあ、二〇・一三の数少ない笑顔つて見てるこちらが微笑まし

くなるよな。

『アンリエッタ王女陛下のおなーーーついーーー。』

毎。

野菜スープ（うますぎるー）を完食した俺は、マルターの親父と共に
お姫様歓迎式にギャラリーとして参加していた。

トリステイン学院生徒全員が集合しているといつだけあって、実に
多くの生徒で溢れかえっている。

『きみ———本物のアンリエッタ様よー。』

「へえ……確かに美女と言われるだけはあるなー。」

「よし満足だ。……んじゃ、ウーン、俺は女王陛下の為にお皿じ物を作
らなきやならんから」

「ああ、分かった。俺はもう少し見てるよ。」

尊されるだけはあるところの物だった。
馬車の台の上に立つて手を振つている女性は、可憐で、清らかをもつ
た少女。

「私のほうが綺麗よね、ねえ、ヴェン？」

「……うおー、こいつの間にこー、まあ綺麗かビーチかで並べば、ビーチ
も。だな。

まあ、キュルケと女王陛下はジャンルが違つ美しさだな

「じやんる？」

「まあ、綺麗にも色々あるって事だ。キュルケは綺麗だけど、女王
陛下はまた別の綺麗さがあるな。」

「ふふ、あっがとー」

「どういたしましー。」

オスマン学院長と姫が話しているのを見終えてから、
ひと足先に撤退する事にする。……してキュルケが頬を染めてば
つかなんだが……。

評論会については良い勝負だった。

僅差、と思いたい（点数は付けていないので解らない）がタバサが最終的には勝利。

キュルケが悔しそうにしていたが、俺共にタバサを祝つてやった。

シルフィードがとても嬉しそうにしていた。

あー、使い魔欲しい。

「おな～～じ～～ジ～～！」（後書き）

雪「シルフィードよりも先にキュルケにフラグ立てちまつたＺＥ！」

というわけで、十四巻。

戦闘が書けるのにはどうやら次巻にならうです
えつ、醜い戦闘描写を見たい訳ないだろだつて？

「……いや、現役皆『ソーバイ』の所属の湯は哉闇がダメだ。

enotci

所て 気になる所が二つ

田舎の駅は出でてくる「謎の男」ですか
機関スンバーと何が関連
があるのでしょうか?気になる俺です。

使い魔は何にするか、アンケートでも取りたいと思います。

- ・作者の好きで良いぞ、ぱっかりーーー
どちらかでお願いします。

感想は作者にとってのオルナミンであり、マッヂ（炭酸飲料）で

४०

20・15! 「姫殿下の頼み事」（前書き）

待たせたな！

御免、気分が乗らないのか出発出来ませんでした。
気づいたら？惚れ薬編？も飛ばしているとこつ。

まあ後から？惚れ薬編？は入れたいと思います。

「アーティストの仕事」

現在時刻、日も沈んだ夜。

今夜も一定時間まで警備をして、終える予定だったのだが。

?不法侵入者発見、学院内の生徒かもしけませんが、ご確認を。

とのダスクからのメッセージにより、今現在その対象を追跡…とい
うか脅かしているだけだが、…をしている。にしてもリアクション
いいなこの人。…というか声からして女の子か。
罪悪感もあるが、今更なので続行している。

といつても、俺が普通に物陰からわづ、と飛び出しても、こんなに良いリアクションはしてくれないだろう。

だが、もし、両腕と両手？だけが追いかけてきたら？
現在能力はN.O.・2の身体移動（仮名）だ。

「あ、あ

と、なるわけである。

因みに、今上げている声は某神隠しの顔なし君の声である。

そろそろ止めるか、これ以上やつたら俺がお叱りを受けるかも
しれん。

ふらふらになつてゐる田の前の人物を見て、俺はそう思ひざる終え
なかつた。

「はあ……はあ……ひつ……」

「あー、もう大丈夫だから。……警備員です

「あ……、そうですか。……はあ……」

散々驚かせた少女に職名を名乗つて話しかける。

と、現れた俺に気づいた少女がビクッとなる。

只、警備員という職名を聞いて、どうやら少女は落ち着いたようだ。

うーん、肝が座ってるな。…否、IJKの学院の生徒にしては、だけども。

こんなに早く落ち着けるもんかね？俺は無理だけど。

「失礼ですが、お名前をお聞きしても？」

「は、はい。」

少女が慌ててフードを脱ぐ。

…俺、何処かで死亡フラグでも建てたかな…。

なんとまあ、散々驚かせていたのは、眞間に見たあのアンリエッタ王女本人だったのだ。

予想の右上を行く、やばいぞ。このままだと下手すりや首ちょっとじやね？

やべえ、どうしよう。

「あ、アンリエッタ姫殿下でしたか…！」

「止してくださいませ、私に非があるんですからー。」

慌てて、片膝付いて頭を下げる。

DOGEZAという選択肢もあったが、ハルケギニアの人物に伝わるかどうか…。

ともあれ、何とか一命は取り留めた。

過去の自分に「てめえ、何処で死亡」フラグ建てたんだこの野郎」とでも言いたいが、

「分かりました。…それで、お尋ねしますが、姫殿下は夜中に何用で…？」

「もう堅くならずにお願いします。…実は、」

少し躊躇つ素振りを見せる姫殿下。

秘密の「」用でしたら、喋らなくても結構ですが、とにかく一つだけ。

「「」の学院内に居る、ヴァーリエール嬢に会いたいのです」

「ヴァリエール嬢に…、ですか？なら、こ案内致しまよつか？」

「いえ、場所は解つて居ます…あつ、でも、護衛、をお願い出来ますでしょうか？」

「あ、はい。では、付いてきてください。フードは付けて貰つて構いませんよ。」

何から護衛するのだろうか、と一瞬疑問符が浮かんだが、姫殿下のお願いを断るのは失礼だと思い、承諾した俺であった。

「あれじやね、俺の両手だらうな。
だが自重はしない。驚かせる事が趣味でも、そして今現在、特技と
なじつしあるのだ。

「うわあっ、ひょっせめろっ！ ルイズ！」

「ひみこあひこあひこ...」

「たはは…喧嘩してやがる…」

「びひしましょつか…、

部屋の前に着くなり、ルイズ嬢とサイトの喧嘩と思われる声が聞こ
えてきた。

耳を澄ませてみれば、ビュッシュビュッシュ…といつ風を切る音が聞こえる。

パンツー！

「こひつえー！

「おこおこ冗談だろ……」

まさかの使い魔調教…？否、評論会はもう終わってるし…ハツ、まさかそういう趣味（ＳＭ）してるとか、あの二人。

俺が一人への見方を変えかけている所。

コンコン。

「失礼します…」

ガチャリ

「え、ちょ、開けちゃうの？姫殿下？！」

扉を開くと、そこには予想通りというか、そうであつて欲しくない光景があつた。

乗馬用の鞭と思われる物を手にしているルイズ嬢。

そしてそれから逃げる体制のサイト

いや、セーフでした。サイト君は一般です。

「姫様！？」

「それに……ヴェン？」

俺はオマケかいな、こらひでえ。

姫殿下はルイズに話しかけている、俺は取り合はずサイトに話しかける事にした。

「相変わらず賑やかなのね。」

「姫様、何故このような時間に？」

「おいおい、また何かやらかしたのか？」

「何時もの事だけじな……うう、ヒリヒリする」

何時もの事つて……まああの爆発魔法に比べれば幾分もマシだな。ギヤグ補正なのか知らないが、あれを至近距離で放たれて生きてられる気がしねえ。

もうあれ一つの「成功」魔法でいいんじゃね？

二つ名が「爆発」のルイズになりそだが。テロリストくせえ

「私は、ゲルマニアに嫁ぐ事になりました。」

「な、なんですって？！寄りにもよつてあの野蛮な成り上がりのようないい國に？」

「仕方ない事なのです…小国であるトリステインを守る為にはゲルマニアとの強い協定が必要なのです」

「そ、それでも…」

「私は王女です。…国の為にこの身を捧げる事に、躊躇いは無いわ」

「なあ、ヴェン。よく言へ、政略結婚？つて奴なのか？」

「ああ、そうだらうな。…にしても？野蛮な成り上がり？…ねえ。」

ゲルマニアについての話は色々聞いている。

国土面積はトリステインの10倍…姫殿下がトリステインの事を「小国」とつたのもうなずける。

因みにトリステインの国土面積は約7万km²。

社会風習や政治制度も他国とは一線を画しており、メイジではない平民でも金があれば領地を買い取つて貴族になることができる。この事がどうやら「野蛮」と言われている理由のようだ。

まあ、トリステインの貴族はお堅いが。

確かに、キュルケのツエルプストー家もゲルマニア貴族だつたはず。性格は彼女のような似てゐる人物が多いと聞くし、俺的には良いところなんぢやね?と思うが。

「でも……その前に、やつておかなければならぬ事があるのです……。

」

それから姫殿下は淡々と話し始めた。

ただ……、そのお願いと言える物が思わず険しい顔になつてしまふ物だつた。

簡単に言えば、空に浮かぶ島とされる?アルビオン?の王子、ウヘルズっていう人物に

姫殿下は?手紙?を送つたらしい。もし、それが他の者などに見つかるような事があれば、

今回のゲルマニアに嫁ぐ、といつ話は無しになつてしまつ。

その手紙を回収して貰いたいのです。

普通なら、遠出のお使い程度で済むかもしれないが……

現在、アルビオン王国では内戦が起きてゐると聞いてゐる。

実際詳しいことは解らない。とりあいず、行くのは戦地に突つ込むよつな物、だ。

「部外者が口を挟むのも何ですが…流石に危険だと思われます。アルビオンは現在内戦が起きているそうではないですか」

「分かつています……私は酷い女です…戦地で危険が伴うと分かっていながら、友人である貴方を行かせるなんて…でも…貴方しか頼れる人が居なくて」

だからって友人に頼むのわよお…なあ、ルイズ嬢
と思ひながら、その助けを求められた当本人を見ると。

「姫様直々のお願いなんて光栄ですわ！」

何故か目を輝かせて姫殿下の手を握っていた。

答えはYesか。

怒りや疑問を通り越して呆れてしまった。

でも、なんとなく、この少女が断る所は想像が付かなかつた。
フーケのゴーレムとの戦いでも、逃げる所か、ゴーレムを睨みつけ
ていたのだ
…只者じゃないな。

「ならば、俺も手伝わせてくれ

「…貴方も…?協力してくれるというのですか?」

「アンタ、警備員の仕事はビリあるのよ。」

「どうせ居ようがいまいが関係無いような状態だよ」

まあ、警備補助員が居るからな。

この学院がしそう襲われているなら、もう少し考えるが、見回りのダラケっぷりを見てる限り、大丈夫だわ。

随分物騒な観光になってしまったが、アルビオン…^{空飛ぶ}王国を見てみたい。

あれだぞ、リアルピュータだぞ。

バルスって叫んだらどうなるんだろう?…といつかそもそもビリやつて浮いてるんだ?

思考がズレた。

兎に角、自惚れではないが、俺が同伴すれば守れる筈だ。ルート等を内密に選択すれば安全に進める可能性も無いわけではない。

ならば。。。

「出発は何時の予定?」

「え、あ、明日の朝にはたつて貰います。

アルビオンが接近する日に間に合つ事が出来るでしょ?から

「なら、自分は明日に備えて準備でも。…んじゃ御休みなさいませ

そう言ひうと、俺は返事も聞かず、部屋を出る。
若干気分が悪い。

自分でも気が付かなかつたが、多分俺は怒つてたのだろう。

20・15! 「姫殿下の頼み事」（後書き）

雪「散々待たせておいて何」の駄文…次巻からがんばる…」

ところがで15話。

どうも作者は、一度に三人以上のセリフを書き分けられません。
うん。苦手。

次回は漸く港へと出発できそうです。
ノーバディーも創造する予定。といふか、まだ三種類しか出てない
のね。

まあ、頑張らせていただきます！

20.1.6. 「漁町への道中」（前書き）

はあはあ、やつこ出来たぜ……。

20・16・「港町への道中」

部屋を出で、元々あと少しで警備を終える予定だったので最後に一通り見回つてから…。と。

【魔弾の射手】

最早諦めた事ではあるが、ニート教師を発見したので。
…つと、モードは『麻痺』そして、『狙撃』。

そして、力チャヤ力チャつと出でてきたガンアローを合体させ、ライフルにする。

屈んで、銃身後部を脇に挟んで、皿を細めながらターゲットサイトを覗く。

幸い、ハルケギニアの夜は、二つの月のおかげで良く見える。

サイトの中心が二ートと重なり…、引き金を引いた。

ターンシ一ターンシ一

「眠れつー。」

ビヤン！

「Oホー。」

「YESー（ガツツポーズ）」

どう考へてもハツ当たりです、有難う御座いました。

「ん、にしても……戦地か……」

戦場、戦地。恐らく、今まで俺が田こした凡ゆる（あらゆる）光景
より、酷い物だろう。

おまけに、此処は魔法世界。規模も違うのだろう。

そうなつてくると、身を守る為の物が必要だ。

特に、ヴェリエール嬢。彼女は攻撃面はあれでいいものの（爆破魔
法）、防御方法が全くと言つて良い程ない。サイトが居ても、守れ
る範囲は限られてくる。

「……んー、盾何かを持たせる訳にもいかねーし……」

あのお嬢様が持てる盾なんて、早々ない筈だ。使いやすさを重視
した小型の盾もこの世界に無いことは無いんだが、生憎と俺は持ち
合わせていない。

それにしても、と。ウンは思つ。

全くと言つていいほど、彼女は戦地へ行くことに抵抗を示さなかつた。

『貴族は魔法が使えるから貴族なんじや無い…敵に背を向けて逃げないのが貴族よ…』

今でも思い出せる、その言葉。

恐らく、あの時（フーケの時）と変わらないのだろう。

戦い、任務は誇りを持つてやり抜く。

正直、俺には理解出来るか怪しい所だった。…誇りより命のほうが大事に決まっている。

死んだらそれで終わり。後悔する事も出来ずに、だ。

だが…彼女は強いのだろう。

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違いない。

なら…、俺は敵に向けてでも、彼女を…いや、彼女達を守らなければならぬ。いや、守りたいのかな
幸い、寿命なういうらもある。なに、観光がちょっと遅れるだけだ。

「つたく…これは追加給料を求めないと駄目だな…」

ともあれ、冗談抜きで頑張らなければ行けないのは日に見えている。明日を万全に迎える為、俺はベットに潜り込むのだった。

ヴェンが気づいていないだけではあるが、彼女はただ単純に無謀なだけである。

はてさて、それに気づかされるのは何時頃か。

翌日。

幸いこの日は雨も降らず多分、昼頃にはポカポカお天気になつているだろう。

どちらかと言えば、そちらの方が大助かり。

「（最初も目的地点は…、ラ・シェロールだけか。）」

港街である、ラ・シエロール。その港街は、比較的高い山にある。
お氣づきであるだろ？が、すじく矛盾している。
港と言えば、海にあるもの。だが、まったく正反対の山にあるとこ
うのだ。流石にこれには頭を捻らざるには居られなかつた。つまりど
うこいつ事だつてばよ。

答えは単純。

此處ハルケギニアでは、「フネ」と言つのが存在する。
ええ、「船」じゃありませんとも、「フネ」ですわ。理由？ 知るわ
けない。

船が移動するのは、なんとお空。現代で言つ飛行機である。

：科学が発展しないのもつなずけると言つ物。
動力は風石とか言つモンだそうが、魔法石と覚えて頂ければそれで
良い。俺もわからん。

といあいす、装備を付け、服を着替え何時も通りの黒いローブを着
籠み、外へ出る。

出来れば朝飯を食つていきたいのだが、恐らくまだ作つてくれてい
ないだろ？が。

といふ事は昼まで我慢か。こればかりはラ・シエロールの料
理に期待するしかない。

あれ、初の街らしい街での外食じやね？なんか嬉しい。

「ヴェ、ヴェルダンテエエエ！」

今日は良くない日になりそうだ。まる。

俺が門を田の前にしたとき、恐るべき光景を田にした。

体長が一㍍の生徒並みの「カサのモグラ（ジャイアントモール）」が飛んできたのだ。

洒落にならん（＼（^○^）／）

何とか下敷きになるのは避ける事が出来た。何故か達成感がする。些細だな。

つと、そうではない。朝っぱらから、こんな悪趣味な事をする奴は誰だ！

「ああ、ヴォルダンテ！僕のヴォルダンテに攻撃したのは誰だ！」

何やらシャツの胸元を開いた、いかにもつて感じの貴族のおぼっちやまがモグラへ走り寄る。

被害者か…となると、このモグラ、この少年の使い魔か。

何か、特別恨みは無いが、ざまあ。

初対面に、何言つてるんだと聞かれそうだが、一目見て何故か言いたくなつた。

間もなく、犯人と思われる人物が何かに乗つて降りてきた。

おお…ありやグリフォンだな。うむ、顔イケメン。

ただ、首から腹に掛かってるエプロン（？）、てめえは許さねえ。
正直、あれがなければ「かあっくういーいーーー惚れちゃいたうだぜ、
グリフォン！」だけだ。

そして、グリフォンが鮮やかに着地し、背に乗っていた人物がサツ、
と飛び降りる。
降りてきたのは、簡単に容姿を説明するなら騎士ナイトそのものだったと
言おう。

『銃士とかに出てきやうだよな。あれ

「済まないね、流石に自分の許嫁が襲われているのを止めない訳には行かないのでね」

「なつ…あればグリフォン隊の！
「い、許嫁エ！？」
「わ、ワルド様！」

反応はそれぞれ。俺は今一状況が掴めない。
…どうやら、キザ少年の使い魔を吹っ飛ばして、俺に悪い光景を見
せたのはこの男らしい。

まあ、正直モグラの一件は差ほど気にしちゃいない。
面白い光景でもあったからな。『巨大モグラ、空を舞う』ってか、
流石ファンタジー。

「ああ、僕のルイズ。…相変わらず君は軽いな、羽のよつだ。」

「わ、ワルド様…」

成程、騎士様も負けない程キザでござりますね。
あのセリフ、俺には到底言えないと…自分が言つ所を想像して、
無駄に悶えた。

「よう、サイト。」

「お、ああ。ヴォンか。…つたぐルイズの奴…」

「何だ何だ？妬いてるのか？」

「そ、そんなんじゃねーよ！」

つたぐ素直じゃないな。そんな面白く無いそつたな顔での二人を見てたら、そりや気づかない筈ないだろ。
だが…恐らく此処に居る俺の聞いていない、参加者一同についての
情報を取り合はず聞く。

「なあ、あのおつせんとあの坊っちゃん、誰だ？」

「ん、あのキザ野郎はギーシュって名前。彼奴、昨日俺達の会話を盗み聞きしてやがったんだ。」

んで、彼奴も『姫様の為ならつー』とか言って付いてくる事になつたんだ。』

「なんじゃそりや……んで片方のお前のご主人をお姫様抱っこしておっさんは？」

「それは知らねえ。… そう言えば、姫様が護衛の者を一人付けて言つてたな。」

ははーん。

片方は勇氣と無謀を履き間違えた奴、片方は詳細不明の騎士様ってとこね。

だがあえて言おう、ギーシュとやら、お前は要らないと。

取り合はず、いつまでもイチャイチャしてもらつていのにも何なので、声を掛ける事に。

「失礼、貴方様は？」

「僕の名前はジャン・ジャック・ワルド。『グリフロン隊』の隊長を務めてる。』

今回は姫様に直々にお願いしたんだ。君たちの護衛をさせてくれつてね。… そういう君は？」

「此処トリステイン魔法学院で警備兵を務めさせて貰っています。ヴェンと言います」

「ああ、宜しく頼むよ。」

うん、丁寧に返してくれたな。良い奴っぽいな。

その『グリフォン隊』がどれほど強いのかは解らないが、隊長を務めている程の男だ。

戦力としては鍛錬を詰んだとは言え、実戦経験豊富なワルド君のほうが強いだろ？

ん？何で君って呼ぶかって？

良く考えてみる、前世と年齢合わせて……止めた。今は今だよな！
合計年齢が中年な事に気づいて、現実逃避する俺。

S i d e 三人称

さて、場所も変わりヴェンと、今回『手紙回収隊』である総勢5人のメンバーは、ラ・シェロールへ向け、パッカラパッカラと馬に乗つて道を進んで行く。

「…天気良いなあ…眠くなるぜ…んちくしょー」

ヴェンの予測通り、出発して暫くで天気が晴れた。美しい青空である。

この世界は科学が進化していないメリットである『NO、空気汚染』

がある。だから『空氣うめえ』のだ。

勿論、それは夜でも同じで大きな月のせいで若干見づらいが、それでも夜空満天の星空は素晴らしい光景だ。

「ルイズの奴、『ああ、ワルド様』なんて言いやがつて…」

こちらは絶賛不機嫌中。

目線の先には、グリフロンに乗った騎士^{ルイズ}と主人様。何故だか面白くない。

：これが嫉妬心であると気づかないのは、恋を知らない彼には仕方ない事かもしれない。

かといって、ヴェンもヴォンで前世を含め、全くと言つていい程恋愛関係とは縁が無い。

彼女の出来た友人を冷やかしながらも応援してやる側。

それどころか、『彼女が出来ても幸せに出来る訳ないから』と、モテない事を喜ぶ事は無いが、

まあ、楽で良いなあという感じだったようだ。ボッチで無ければそれで良いらしい。

『なんだ坊主。お前さん、娘っ子を取られて不満みたいだな？』

『だからあ、そつじゃねーって』

「お、デルフカ。」

『よお、兄ちゃん。また会つたな』

「だなー」

からかつても同じ返答しか来ないので、デルフは自分に掛けられた声に反応する。

この剣、実は寂しやがり屋で相手にされないまま放置されるとイジけるという可愛良い…くない性格だ。

彼が美少女の声だとかだったら、需要があるのだろうが、声は正に気軽に話しかけてくるおっさんの声。

でもまあ、ヴォンはこの剣の事が中々気に入っている様子である。

『剣が喋れたら寂しくないな』『心とかどーなつてんだ?』

興味心身で時偶サイトから借りて一人（正確には一人と一振り）で、語り合つたりしているようだ。

四桁レベルという凄まじい程長生きしているこの剣は、大半の記憶を忘却してしまっているが、

たまに聞ける昔話というのは、中々面白い。それが気に入っている理由もある。

「所で、聞くが……サイトは何か武術でも習つてたか?」

「ん?いや、無いけど?」

彼がこう質問したのは理由がある。

使い魔兼、ボディーガードでもあるサイトが、唯の高校生が何故剣を振るえるのだろう。

「デルフの丈は背に背負わなければいけない程度…160ぐらいか？無論、重量も比例して重くなるのだが…鍛えたりしないと持てないような重さだった。」

「何でそんな事を聞くんだ？」

「いや、デルフを振るうのにせけに？慣れてる？な、と思つても。」

「別に慣れてはないですか？…実際、コイツを振るったのはまだ一回しか無いですし」

『なあに、坊主が俺たちを振えるのは坊主が？使い手？だから。』

「使い手…？それってどういう事だ？」

「それがよ、俺もデルフに聞くんだ。使い手って何の事だってな。でも

『仕方ねえだろ？、何も何千年前の話だ。忘れちまつ

サイトの言葉を引き継いで、デルフがカチャカチャ笑いながら言つ。何故笑つているのがわかるかといつと、何となく、声だ。声で解る。

ヴェンは「何だ、お決まりのド忘れか…」と肩を落とす。

それから、何気なく隣に目を移すと。

「「」機嫌よつ、ミスター・グラモン。」

「ああ、…つて、急に何だねそれにその口調…」

「それとも「股男と呼んだほうがいいでしょ」つか?」

「…君つ、初対面に加え貴族に対しても無礼じゃないか?…それにアレは「股じやなくて…」

どうこう訳か、ギーシュに対しては喧嘩腰なヴェンであった。

早速、来て欲しくも無い危機が訪れたのは、目的地に更に近づいた時だった。

山へ登る道で、崖と崖に挟まれた道。

とっくに闇夜になり、視界も良くない。

ギーシュとサイト、加えてデルフと雑談していたその時。

視界の真っ直ぐ……何かが……いや、聞き慣れている音が聞こえて、

「不味いっ！回避しろー！」矢だ！」

「なんだって？！」

シユツ！

音を経てて、馬と馬の間を弓矢が通り過ぎた。

「何者かが、こちらを狙っている。暴れる馬から飛び降りると、しゃがんで弓矢の飛んできた方向を見る。

暗くて今一見えないが……恐らく、盗賊などの類だろう。

ザツ！

「つまつー！」

今度は上から。

「どうやら崖の上にも居るらしい、これは益々危険だ。

「盗賊のようだな、僕が前を何とかするから、何とか耐えてくれ

「ワルド様！私も戦います！」

「ライズ、気をつけろ！」

「わかつてゐわよ！」

ふむ、正面突破するしか方法は無いな。…通常なら。
崖の下からじや上は狙えないだろうし、明らかに不利だ。

俺しか上は狙えないな、と改めて思いつつ。

「【旋風の六槍】」

そして灰色の茨と共に、腕に槍が一本現れる。
実際、非殺傷戦では風で相手を叩きつけて気絶させれば良いだけなので、槍は余り使わない。

フワリと風が起き、地面を両足が離れる。

そして、そのまま高度を上げて崖の上に降り立つ事が出来た。

うん、今日は絶好調だな。つと。

「ちつ、メイジがあと一人居たか！」

「殺しても構わねえな？目的は金だな」

「上だけで4人か…これは思った以上に少ない。
嬉しい現状だが、思案しているうちに、一人の盗賊が弓矢を弓に番
え、放ってきた。

次は咄嗟による事はしない。何故なら

ヒヨウフッ！…パタッ

「なつ…、弓矢が効かねえ？！」

自動能力の「風壁」があるからな。
オートスキル

能力は簡単、接近した対象を風で押し返したり、今みたいな弓矢に
対しては勢いを消す、といった感じだ。

本来俺を射抜く筈であつたであろう弓矢は、風壁に勢いを消され、
虚しく地面に落下した。

「ハハハ死ねえ！」

弓では無い、片方のロングソードを持った盗賊が俺に切り掛ってきた。

「はっはあ、無駄だぜえ！」

「ぐあつー。」

再び見えない壁に阻まれて、盗賊が弾き飛ばされる。

「うーん、某学園都市第一位になつた氣分だな。…といつか、危機感ないな俺。」

お相手さんと言えば、「接近したら危ないぞ。」「…じゃあどうするんだよ」

などと小声で喋つて居る。

んじやま、いらっしゃり……他の救援にも行かなければならぬ」、一発で決める。

「トルネドッ！」

トルネードでは無い、トルネドである。
まあ、どの道起きる現象は同じ。巨大な竜巻が不自然な、有り得ないスピードで現れ、

盗賊四人を派手に巻き込む。

全長30メイルはある巻きが、盜賊四人を巻き上げ、あつていう間に4人は落ちたら即死な高さまで上がつた。高所恐怖症な人間が受けてみろ、泡を吹いて気絶するな、コレ。

しかし、このままでは呑きつければ先程も言った通り、スプラッタ間違いなし。

バタツ、バタツ、バタツ、バタツ。

.....
o

「きつかり四人、いつちょ上がりだな。さてと…ん？」

しっかりと生きているか脈を取つて、全員気絶しているのを確認。

そして持つていた縄で四人とも締め上げて、一息。

「…どうやら下の喧騒も収まつたらしい、崖下を覗いたら、四人とも無事だつた。

あちら側も盗賊を縛り付け終わつてゐるようだ。

そして、俺がふと、別の風を感じて見上げると、

「あら、もう終わつてたのね。流石はダーリンだわ」

「……」

「さゆい！」

俺が見たのは、若干残念そうに、だが嬉しそうにしているキュルケ

何故か俺を見て思案顔のタバサ嬢、それに加え、彼女の使い魔シル
フィードであつた。

No.16!「港町への道中」(後書き)

雪「一般人じゃ一発KO。こんなで大丈夫か?」

村「ギー・シユが何故二股男か知つてゐるかについては、サイトから聞いた事にしといてくれ」

2011/12/15

ルイズに対する

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違ひない。主人公の思い違いに修正。

ご指摘なさったエイワス殿、有難う御座います。

槍「あれエ…俺要らねえんじゃねエ…」

先生、文才が欲しいです!

まず始めに一言。御免なさい。

色々と書いている内に、納得出来ない所や治したい所が色々出てきたので、

また、初めから書き直していきたいと思います。

- ・主な変更点

- ・『謎の肩当て』が最初から使用可能
- 効果はアーマー・テラ（鎧の男）の姿になり能力を使用する事が出来るという物。
- ・『ヴァニアスの能力を扱う事が出来る』但し、アンヴァースを作り出す事は出来ない。
- ・幼少期の話数を増やす

それ以外は特に変更せずに行きたいと思います。

何卒、身勝手な作者であります、応援をお願いします(;)

No.1 「スプラッターな死亡事故」（前書き）

氣を取り直して一本目。
といっても、内容を少し弄つただけですが。

No.1 「スプラッターな死亡事故」

「知らない天井だぜ」

「ごほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。
現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。
つてところだ。」

『大丈夫ですか~、主に頭が。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や?」

神だ！目の前に神がある！
まー予想なんですけどね？

『知つてたんですか…？』

「いや、違う。…といつかモノローグもとい俺の思考読むなんて
お前やつぱり神だろ、」

『やけにテンションがお高いですね、…まあそれは良いとして…』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！
やっぱリテンプレか！『ごほん。』おつと。

『すいませんでしたあ！』

わーお、見事な土下座だね！そついえば、【土下座】ストラップと

があつたな。

何気ストラップはやつてんだよ。mynnフレンドの筆箱にジャラジャラ。ボクサーパンツの奴ばっかり。

ん、過去を思い出してたけど気にしたら負けだ。別に何かに負ける訳ではないが。

それは兎も角、田の前で土下座しているのは割りと若い姿をしている自称神。

つて追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…までよ、でも俺の死因、溺死じやねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。インク関係ないのね。

だって俺の死因、トラックに吹き飛ばされてスプラッシュな筈だからー。因みに人間つて首ぎつちよんしても、血が流れている数秒 それこそほんの数秒だが、生きてる。

あれはキタな。色んな意味で。

『そこで私は…・私の上司なんですけど、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほど。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にもしがみつくぜ。つまりは俺もその一人つてわけだ。まあ、特に未練もないからこゝ

な平常心でいられるんだろうけども。

毎日、何がしたいのか解らない日々だったからなあ

『元の世界には無理です…すこませんけど、それが捉となってるの
で…。』

「はあ、して、その捉つてなんぞ？」

つまりは、俺をもといた世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらし
い。

それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、田の前の神様、
顔青くしてたよ。。

よつまどじ酷いことが起きるんだな。すぐ一気になるぜ

正直、納得の?な?の字もたいして出来てないが、生き返られるな
ら結果おーらい。

「んで、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよっ。」

『えっと…簡潔にいえば、平行世界に転生してもらいます。
ぱらわるわーい

「それって、創作の世界とか、なのか?」

「はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。

「うせ楽しむなら、楽しもつ。そして一番気になる部分、お願ひをどれほど聞いてもらいたるかは…。

『CAPTUREは4つまでですね。…私より上位の存在になれば、まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がある。」

ひやつせー！

お願い!とま4つまで。やつたね!

なうばぐるなお願いをするか。

あー、こいつ野つて、こざひとんなじるんなチートにしそうか迷うな…。

ところが、チートの基準がわからなーし、それりしこバトル漫画も少しも持つてねえ。

「うーん…なら一回戻せ…。」

一個目。

思いついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からN.O.T.I.C.E., N.O.T.の能力を得る、というものだった。

しかし、神様の『機関全員能力を使えるようにしますね』との一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしい。

二個目。

二つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足!」と草薙君ボイスが響いたのだが、どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。ダスクからトライワイトゾーンまでなんでもこなれだ。

：確かにノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ気にするな（何

三個目。

俺が憧れてもいた、『鎧の男』の能力を使えるようにしてもらひた。やつたねたえちゃん。

四個目。

んで、次は『諦めろん』な人…『ヴァニタス』さんの能力を使う

よつて。

あの人への声優は中々好きだつただけに、これも嬉しい。

『容姿等は私にお任せあれ!』

うん、僕、満足。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です……抽選なので仕方ないですね』

「え、それって何処　　うわちょおまここれ聞いてねえ」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、氣づくと謎の穴にまつさかさま。

嫌な予感しかしない俺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0840x/>

No.0 !

2011年12月16日21時51分発行